
愛していると言わない

あしなが犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛していると言わない

【Zコード】

Z5374W

【作者名】

あしなが犬

【あらすじ】

夫となつた人は毎晩『愛している』と言って私を抱きしめる。だけど、私は決して『愛している』とは夫に言わない。だって、夫は私を愛していないけど、私は夫を愛している。だから、絶対に『愛している』と言わない。それが私の最後のプライド。

そんな感じの複雑な夫婦と複雑な色々を巡る架空世界が舞台の物語。

「愛している」

私の夫となつた人はそう言って私を一瞬だけ抱きしめるとすぐに離しへッドに横になつた。

取り残された私はベッドの脇に立ちつくし夫を見下ろした。結婚して数カ月、彼は誓いの口づけを除いて、こうして毎晩抱きしめること以上のことを私に決してしない。

寝付きがいい夫はもう眠つてしまつたらしい、私に向けた背が規則正しく上下している。

(それなのにビックリして『愛している』なんて言ひの~)

私を拒絶するかのようなその背中に私はいつも問いかける。だけど、一度だって本人に聞いたことはない……だって本当はその答えを私は知っているから。

(貴方にあるのは私への罪悪感だけ)

その罪悪感故に貴方は私と結婚した。
その罪悪感故に貴方は私に愛を呟く。

…だけど、罪悪感しかないから貴方は決して私に触れない。私を本当に愛することはない。

(頼んだら抱いてくれるのかしら?)

そんな意地の悪い事を考えて、絶対にそんなこと言えるわけがないと自嘲した。

何しろ彼が私を愛していないことを知っていたのに、彼が抱いているだらつ罪悪感を利用して私は彼に結婚を受け入れさせた。

それだけでも彼には申し訳なく思っているというのに、これ以上

彼に何かを望むというのは私の我儘の他の何物でもない。

頭ではそう分かっているといつのこと、元のうして私の心はこんなに傷ついているのだろう?

(だつて、私は貴方をずっと愛しているから)

瞼をつぶればずつと出合つた頃の彼が私に笑つて手を振つた。今となつては決して見ることが出来ないその姿を思い浮かべて嬉しくなつてしまつ。そんな自分が無性に虚しくなつて溜息をついた。

(せめて自分の本当の気持ちを告白しないことが、私の最後のプラ
イドよね)

私は毎晩、『愛している』と告げる夫に一度もその答えを返したことがない。

○・1（後書き）

何となべてロロの恋愛ものが書きたくて勢いで始めてしまいました。あんまり長こね話にならないこと思つてこらんどすが…、どうなる事やら（笑）

お世話じだとは思こまへが、お付き合こ頂けると幸いです。

私を夜の眠りから呼び起しすのは、朝の光でもなく、小鳥のさえずりでもない。それは隣で寝ている夫の遠慮がちに起きる気配。夫はいつも夜が明ける少し前に起きる。

彼は私が自分に合わせる必要がないと言つたけど、そういう訳にはいかないと一度だけ同じ時間に起きたことがあった。
だけど、その時酷く迷惑そうな顔をされて私の心は折れた。ただでさえ疎まれているのに、これ以上の不快感を彼に与えたくなかった。

だから、私は毎朝夫の起きる気配で一度は目が覚めても寝たふりを続けている。

もし熟睡していたら極僅かな夫の気配で目が覚めることもないのかも知れないけど、悩んだまま寝ている私の眠りは浅いらしい。

その後、一度寝をしても誰が咎める訳でもないけど、広いベッドの上に一人で取り残されると強い孤独感が押し寄せて眠りを妨げるので、私はただじりじりと起きる時間を待つ。

そうして私が起き出すふりをする時間に侍女が寝室の扉をノックして、やっと私は孤独感から解放される。

ノックに答えると美しい笑顔で侍女が『おはようございます』と言つ。それに『おはよう』と返しながら、夫とはこんな朝の挨拶すら碌に交わした事がないと気がついて苦笑した。

夜が明ける前に寝室を後にする気配を感じた後、彼に次に会うのは眠る前だけ。

彼が発するのは『愛している』の一言だけ

そんな言葉、どうして信じられるといつのだらう、いや、きっと

夫はむしろ信じてほしくないに違いない。

彼が妻となつた私に義務感だけで『愛している』と言つてはいると分かつていても、これでは却つて寂しくて辛いだけ。だけど、私は決してそれをやめてとはいえない。

それを聞いて嬉しいと思う私が確かにいるから。そんな自分に私は強い嫌悪感をいつも抱いていた。

…というあまりに暗い出だしでごめんなさい。はじめまして、私の名前はアイルフィーダ・ヴァトル。今年で25歳になる。
他に自己紹介を…と思うけど、とりたてて紹介するほど私には特徴がない。強いて言うなら特徴がない事が特徴なのかもしれない。身長は高くも低くもなく、体型は痩せてもいなければ太つてもいない。髪は一般的な栗色で目の色も黒に限りなく近い茶色。

顔は自分では特別不細工だと思ったことはないけど、一度見ても大抵の人はすぐに忘れてしまいそうな何処にでもある顔で、性格も別に普通だ。

そんな普通という名の皮しか被つていない私が、その皮を大々的に脱ぎ捨てる事になるとは思わなかつた。

そうなつた理由は夫…世界王フィリー・ヴァトルとの結婚

彼との結婚で私は世界王の正式な妻…世界王妃という、あまりにも特別で、地下深くまで沈んでしまうほどに重すぎる肩書を背負うこととなつたのだ。

גַּדְעָן, עֲמִיקָה

広い部屋での一人の朝食を終えると、すぐに控えていた使用人が音一つ立てずに食器を片づける。

「食事はお口にありますか？」

食べ物が半分くらい残つたまま下げるかれていく食器を横目で見ながら、私の後ろに控えていた侍女ルッティがそう聞いた。
あくまで優しい物言いだけど、その言葉に私は彼女を見上げて苦笑した。

見上げたルツティは侍女だけあつて質素な化粧だし地味な洋服を着ているけど、それでは隠しきれない彼女の凛とした美しさはいつも眩しい。

初めて彼女を自分付きの侍女だと紹介させられた時、私はとても申し訳ない気分になつたものだ。

「まさか。食事はとても美味しいわ。」

「ですが、ここ最近ずっと食事を残されていますよね？」

美しいだけでなく、ルッティは侍女としても完璧だ。私のことを監視している訳じゃないけど、いつもセリゲなくちゃんと見ていて気を遣つてくれる。

慣れない環境にいきなり一人で放り込まれた私がここまで何とかやつてこれたのは、彼女の献身的ともいえるサポートがあつてこそだと私は思っている。

だからこそ彼女の働きに報いるならば、食事くらいちゃんとどうないといけないんだわ。だけど、この事に関して言えば私にも言い分はあつた。

「出される食事をちゃんと食べられなくて申し訳なく思つてはいるの。だけど、ここにきて数カ月、私は後宮から一歩も外に出ていなさい。王妃として何の仕事だつてしていない。ただ、日がな一日のんびりと過ごしてお腹も空いてこないのよ。」

世界王妃となつた私の住まいとなつたのは、世界の中心にある神都アッパー・ヤードにそびえ立つ王城。更に詳しく述べばその最奥にある後宮だ。

広大な王城だけで私がかつて住んでいた都市と同じくらいの大きさがあり、私が出入りすることを許されたこの後宮ですら私がかつて住んでいた町くらいの大きさがあるといつ。

それを聞いただけでくらりと眩暈がしたものだけど、いくら後宮が広いと言われたつて、ここから出るなど自由を禁じられる事は強いストレスでしかない。

さらに言わしてもらえば、自由に歩いていいと言つても常にこのルツティを始めとした誰かがいるという大前提があるのだ。

彼女たちにしてみれば監視しているという意図なんて微塵もないんだろうけど、誰かに傅かれたり誰かを連れて歩くという生活と無縁だった私にとって、それはあまりに居心地が悪かった。

「そのことに關しては私たちも色々手を尽くしております。しかし、現状ではイルフィーダ様の安全を確保できるのはこの後宮のみです。窮屈を強いてしまつてることは本当に申し訳なく思つておりますが、もうしばしの御辛抱をお願いせざるを得ません。」

「…わかっているわ。」

この会話をここまで一体何回交わしたことだろ。

その度、私はそれ以上何も言えなくて、ただ聞き分けのいい返事をしている。

「何しろ私は、^{オルロック・ファックス}神を信仰しない陣営の人間です。それを承知でこちらに嫁いできたのだから……我儘は言いません。」

まあ、こうやって嫌味の一つや二つは混ぜているけど。

「アイルフィーダ様にそう言つていただけるとありがたいです。」

だけど、ルッティの方が何枚も上手だ。

私が嫌味を返しているというのに、それを分かつた上で笑顔でそう切り返す彼女に私はただ大きなため息をつくしかない。

0・2（後書き）

たくさんのお気に入り登録をありがとうございます。かつてない勢いで登録が増えていて、嬉しいと思いつつも何だか怖い（笑）嬉しい余つて連日更新などしてしまいました！（多分、このペースは続きません）

読んでいて不快に感じたり、違和感を感じたりされることもあるとは思いますが、作者がまだまだ拙いのだとご容赦いただければと思います。

神を信仰しない陣営 オルロック・ファシズム

それを語るには、まずこの世界について少し説明したい。
ともかくにも、この世界には『神』という絶対的な存在が君臨しているということを、まず覚えていてほしい。

…とはいうものの私はその姿を実際に見たことはない。

だけど、神は確実に実在している。それがこの世界の常識だ。

神は人を蘇らせ、雨が降らない砂漠にオアシスを作り、ドラゴンを退治した。どれもこれも真実とも嘘とも分からぬお伽噺。だけど、その人知の及ばぬ神という力ある存在を、人間たちは信じ仰ぎひれ伏した。

絶対服従を誓った人間を神も庇護し、様々な恩恵を与えた。

神と人間の友好関係は長く続き、それと同じ期間だけ平和と安寧があった。

しかし、数百年前よりその均衡は少しづつ壊れ始めた。

それがすなわちく神を信仰しない陣営の誕生

彼らは神が与える恩恵から離れ人間だけで独自の自治体を形成し、神という存在を否定した。

神に従いしく神を信仰する陣営レディール・ファシズムと私たちく神を信仰しない陣営レディール・ファシズムは、それから大きな戦いこそなかつたが、ある程度の緊張状態を持つて相対してきた。

ちなみに私がいる神都アッパー・ヤードはく神を信仰する陣営レディール・ファシズムの中心地であり、私の夫となつた人はく神を信仰する陣営レディール・ファシズムの位置

づけでは神の次点である世界王だつたりして…。

まあ、ここまで世情というものを踏まえると、私と夫の結婚の意味がお分かり頂けるのではないだろうか？

「神を信仰しない陣営」の人間である私と、「神を信仰する陣営」の王である夫との結婚は、すなわち敵対し合っていた両陣営を結び付けるための政略結婚という訳だ。

それために後宮には正室の私しかいないので、後宮の女同士の争いなどはないのだけれど、「神を信仰しない陣営」である私に対する風当たりは非常に強かつたりして、例えばこんなお人がいたりする。

「あらあ？」のお部屋…何だか油臭いんじゃありません」と？

後宮であてがわれた私の部屋に入ってきた途端、挨拶より先にそうのたまたた女性に張り付いた笑顔が引きつった。

(ああ、始まった)

輝く金髪の長い髪を高く結いあげ、少々濃い目の化粧に派手で露出が多いドレスを纏つた貴族然としたこの女性。

彼女の名前はファイリーン・ディレクト。私より年下のくせに襟ぐりの深く開いた所から見える白い胸が目に眩しい美女で、実は私の教育係だつたりする。

「神を信仰する陣営」の中でも指折りの貴族の「令嬢らしく、神への信仰心があつい彼女は私のことがともかく気に入らないらしく、3日に一度は彼女から講義を受けているが一度だつてこんな感じの嫌味がない時はない。

かくしてファイリーンがいつものように嫌味を言つて、顔の前ではたはたと扇を煽ぎ心底不快そうな表情を浮かべていると、ルッティがすかさずフォローになつていないうつオローを入れた。

「申し訳ありませんファイリーン様。すぐに窓を開けてまいります。」

「ああ、ルッティいいのよ。どうせ匂いの根源はこの目の前にいる、野暮つたい神をも恐れぬ野蛮人ですから、換気した所でどうしようもないわ。ねえ、アイルフィーダ様？」

「……」

（そう語りかけられて、その匂いの根源だとされた私にどうすればいいのだろう？）

（出でいけばいいの？だけど、ここは私の部屋だし、出でいくなら貴方じゃないの？）

ぐつと出かけた罵詈雑言ばげりと飲み込んで、私はぴくぴくと米神を震わせて必死で別の言葉を返す。

「ええ、ええそうですね。ですが、どうして私ったら油臭いのかしら？侍女の皆さんのが毎日綺麗にしてくれているのに。」

「それは勿論生まれてからずっと染みついた香りですもの。どんなに侍女たちが頑張つても、やはり仕方がないことですわ。私、ちゃんと我慢いたしますから。ですが、人前に出る時はなるべく香水を多めにふりかけることをお勧めしますよ。」

そして、『おーほつほ』と勝ち誇ったような高笑いが木靈した。私は思わず頭を押さえたが、変なところで律義なルッティが不思議そうに顔を傾けた。

「ですが、どうしてアイルフィーダ様の生まれついてから染みついた匂いが油なんですか？」

「ルッティつたら知らないの？」

「もうその話はいいです！」

ルッティの問いに何やら嬉しげにファイリーンが答えようとすると、私は少々大きめな声で遮った。どうせ私を貶す言葉に違いないのだ。そんなもの聞きたくない。

私の大きな声にファイリーンは少し目を見張つたが、今度こそ呆れたような私を小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「王妃ともあらうお方がそんな大声を出すなんてはしたないことですよ。まったく、貴方という人は本当に何度も教えても優雅な立ち居振る舞いや物言いが身につかない人ですね。」

彼女の私に対する偏見や嫌みには口にしなくともいくらだって返す言葉が思いつくが、これに関しては彼女の言うとおりだつたりするので、言い返す言葉がなくて私は俯く。

彼女に教えを乞い始めて数カ月、確かに私は一向に王妃として必要とされる素養が身についてはいなかつた。

すると扇で顎を上げさせられ、ファイリーンは顔をすいつと私に近づけた。

毛穴一つない白い肌、これでもかといふほど長く伸ばされた睫毛、つやつやとした赤い唇、彼女は確かに化粧が濃いとしかいえない。だけど、その美しさは作られたものだとしても完璧と言わざるを得なかつた。

その完璧に武装されたに近い顔の中で、だけれど、一番輝いているのは唯一の天然と思われるその青く大きな瞳。

その瞳がぎらりと光つて私を睨みつけた。

「仮にも世界王の妻を名乗るのであれば、いつだって胸を張つてしまひとなさいな。ただでさえ野暮つた貴方が俯いたり背中を曲げていては田も当てられませんわ。」

その強い言葉と強い眼光に私は何も言えず、彼女を見つめ返すしかできない。

しばらく、いやもしかしたらほんの数秒のことだったかもしだい。だけど、私にはそれが酷く長い時間に感じられ、金縛りにあつたかのような私相手に先に視線を離したのはファイリーンの方だった。

「まつたく、そんな事では来週の舞踏会…先が思いやられますわ。」

「へ？ 何ですか？」

「まさか知らないとでも言うんじやないでしょうね？ 来週は貴方の夫の誕生日。その日の夜にある舞踏会を始めとした様々な行事に勿論、貴方も参加するのよ。妻なのだから。」

(誕生日？ 嘘！ 来週…?)

驚く要素がありすぎて、何から驚いていいか分からぬ。

田を白黒させる私を見て、ファイリーンは勢いよく扇を閉じると油臭いと言った部屋の奥にすかずかと進んでいく。

「さあ、時間が惜しいですし早く始めますわよ。今日からは来週にむけて今までよりもびしょしょ行かせて頂きますよ！」

そう言って振り返りながら笑った彼女の後姿に悪魔の尻尾が見えるようで、私は田の前が暗くなるのを感じた。

0・3（後書き）

やつぱり後宮といえば女同士の戦い！と思つたんですが、何だかフ
アイリーン嬢の独壇場でしたね（笑）うじうじしている主人公です
いません。でも、第一章はこんな感じの主人公が続く予定です。

さて、次くらいからまだ『愛している』としか言つていらない夫が出
る…予定です。

後宮で私に宛がわれた部屋は、王妃専用らしく後宮の中でも一番広く豪華な造りになつてゐる。

白を基調とした中に金や赤といった色彩で施された細工は纖細で格調高く、基本が庶民の私には少し居心地が悪い。更にいつも誰かによつて片づけられ埃一つない室内は、いつまでたつても私を受け入れてくれない。

まるで他人の家か宿屋にでも泊つてゐる感覚。

眠りが浅いこともあるだろうが、どんなに疲れていても私はこの部屋で癒されたり、休養できたと思つたことは多分一度もない。

その自室でファイリーンの教育というより苛めに近い講義に耐え、疲れすぎてすぐにでも寝てしまいそうになりながらも、私は夫を待つていた。

どんなに遅くなるうとも夫はいつも私の部屋で眠る。表にも自室があると聞いているけど、結婚以来その部屋で眠つたことはないはずだ。

その理由を彼に直接聞いた訳ではないけれど、偶然聞いてしまつた侍女たちの噂話でそれは明らかになつた。

『ねえ！聞いた！？』

私に傳いてる彼女たちからは信じられないほど生き生きた声が静かな廊下に響く。

小さな声で話しているつもりだろうが、その廊下はとても声が響き、一人で散歩させてほしいと少しだけ許された自由の時間（とはいっても後宮内だけだけど）を満喫していた私の耳にそれはよく聞こえた。

『聞いたわよ！あのお静かな陛下が声を荒らげてお怒りになつたんでしょう！？』

（へえ…それは確かに珍しい。何があつたんだらう～）

夫の話ということもあって、立ち聞きは悪いと思ったが、何とか物陰に隠れて聞き耳を立ててしまった。

『それも後宮の事で…』

『そつそつ…後宮に行く行かないでもめたつて話じゃない…』

興奮する彼女たちの会話に比例して、私の心は冷たくなるのを感じた。

『まあ、く神を信仰しない陣営への王妃様じやあ。陛下が後宮に行く氣にならないもの分かるけどねえ。』

『へえ…それじゃあ、後宮に行きたくない陛下を重臣たちが止めようとしたつてこと？』

『多分ね。まあ、陛下も我慢の限界が来たんじゃない？ここまでよく続いた方だと思つわよ？部屋の片づけとかしている感じ、あの夫婦…実際にはまだ夫婦じやないし。』

その言葉に同意の声がいくつも上がる。

下世話な話…正直、侍女たちには関係ないと大声を張り上げたい気持ちもある。

だけれど、ここに彼女のたちの前に怒つて現れたところで、全て

事実なのだから言ひ返す言葉もない。それよりも

(ああ、やっぱり本当は私の所なんかに来たくないんだ)

侍女たちの噂によると、後宮に行きたくないと訴えた夫を重臣たちが諫めたことに彼は声を荒らげるほど立腹したということなんだろつ。

だが、結局夫はその後も毎日私の部屋にやつてきている。

夫の気持ちはともかく、現状く神を信仰しない陣営への心象を悪くしたくない以上、私がないがしろにそれでいいといつ噂は問題なのだろつ。

そんな噂が立たないよつ夫は毎日私の所に通うのだ。

そうして、私は彼が私の部屋を毎晩訪れ、『愛している』と告げる理由を現実として突き付けられた気がした。

それまでは彼の態度が私にどんなにそつけなくて冷たくても、心のどこかでもしかしたらと期待していた。

だつて、好きな相手と夫婦になつた……どんなに心に強い戒めをしても、『愛している』と言われたら期待してしまう。

だけれど、これはあくまで政略結婚でしかなく、夫にしてみればその相手が彼にとつて扱いづらい厄介な相手だということなのだ。分かつていた。結婚する時、どれだけ自分に言い聞かした？私は夫の弱みを盾にして結婚を迫つたのだ。どうして彼に好かれりうのだ？嫌われても疎まれても仕方がない。

だけど、侍女たちのその話を聞いて酷く傷ついた自分がいた。

そうして、今日も夫は私の部屋を訪れる。

「おかえりなわこませ、陛下。」

いつもはぎこちなくなる一礼も、妙にはつきつたファイリーンの特訓の成果か思わずほどスマーズにできる。

それが嬉しくて疲れていても思わずによけてしまってから頭を上げた私だったけれど、こちらを見やる夫の顔に強い嫌悪感が浮かんでいて気持ちちは沈んだ。

「あの……陛下？」

私を嫌っている彼でも、一礼したぐらいでこんな顔をされたのは初めてで戸惑つ。

「……なんでもない。わっわと寝よ。」

何でもないというが、とても何でもないようには見えない。

お風呂に入った後らしく、ファイリーンと同じ金髪だが、夫の髪質の方が柔らいため、いつもはふわふわとしている髪がべつたりと張り付いている。

とても整った顔立ちをしている夫であるが、私と同じ年のはずだが未だに十代後半と見紛うほどの童顔が、不貞腐れたかのような表情が彼を更に幼く見せていて、私はかつて彼と出会った頃を思い出した。

（昔の私だったら、無理やりにでも何かあったか聞きだすんだろうけど）

夫の拒絶を恐れる私にはそれができない。

嫌われて、疎まれて、理解しても、それを侍女の話を聞いただけでも傷ついているのに、彼に直接言われた日には立ち直れる自信がない。

それにそんな事を言つたら、もう彼は言つてくれなくなるに違いない。

「愛している。」

与えられる毎日欠かされない言葉と、僅かの抱擁。それを惜しんでいる私が確かにいるのだ。

通常なら最後のプライドでそれに答えることはしない私の沈黙のため、それ以上の会話は続かないけれど、今晚は絶対に聞かなくてはならないことを思い出して、私は今にもベッドに横になろうとする彼に声をかけた。

「あのつーつ・伺いたいことがあるんですけど。」

焦つたあまり舌が絡まる。

「……何?」

朝から晩まで仕事をしてきているのだ。私なんかより疲れているだろう夫は、うつとうつしあうに私を振り返る。

「来週、陛下の誕生祭があると今日ファイリーン様に聞きました。私もそれに参加させて頂けるといつのは本当でしょうか?」

ファイリーンは私が出席するものだと決めつけて、今日は思い出したくないほど辛い講義だつたけれど、実際に本当に私が出席するか否かを決めるのは結局は夫だ。

彼が私の出席を良しとするか否とするか、そこを私ははつきりさせておきたかった。その答え次第で明日からのファイリーンの講義を受ける意識が全く変わる。

もし、参加させて頂けるといふのであれば、世界王である彼の隣りにいて釣り合いが取れる私でなくてはいけない。

(明日から少しは忙しくなるのかな?)

ファイリーンの講義は気が重いが、何も目的がないまま過ごす日常で目標が出来ることが何となく嬉しくて、うきうきした気分になる。

「…ああ、それか。」

だが、私の意気込みの強さに反して夫の反応は酷く薄いものだった。

「出たければ出てもいいし、出たくないれば出なくていい。ただ、国民に対する挨拶の時だけは隣にいてもらひことになるが。」

「え…? ですが、舞踏会もあると聞いています。その席に王妃はいなくてもいいんですか?」

ファイリーン曰く、舞踏会は最初王と王妃が揃つてダンスを踊ることが開会の合図だという。

全ての参加者の前でたつた二人で踊るダンスは失敗が許されない。ファイリーンは特訓だと言つて、今日は筋肉痛になるほどダンスを練習させられた。

「まあ、君が出ないなら代わりを立てるからいいよ。」

だけど、夫はあまりにあつさつとやつ言つた。

「去年までは巫女がその役割を果たしてくれていたから、今年もうすればいいし。多分、もう重臣たちから巫女には打診がいっているはずだと思つ。今年はまだ結婚して間もないし、君の舞踏会の参加は見送るわ。」

巫女

彼が何氣なく発した言葉に、妖精のように可憐な少女の面影がよぎつた。

「あ、そうですか…分かりました。」

その声はいつも私の同じ。だけど、鏡台に映る私の顔は今にも泣きだしそうだった。

(どうして?どうして?私は貴方の妻ではないの?私は王妃としての役割すら果たせないの?)

愛されていないなら、せめて王妃として胸を張りたいと思つても、何もさせてもらえない。いや、寧ろ彼らにとつて私なんていないと同じ存在なのだ。

だから、私に何も聞かされないまま、すでに私の代役が当たり前のように存在する。

そのことに強い憤りを感じているはずなのに、立ちすくみ何も言えない私。

昔の私ならもつと思つていていた。昔の彼ならもつと私の心を分かつてくれていた。

(昔ながらの壁など……)

田の前が真っ暗になつた私は、心中に光を求めるよつて田をつ
ぶり過去に思いをはせた。

0・4（後書き）

これにて序章終了！更新と併せて小話のタイトルなどを変更しましたが、特に内容は変わっていません。

次回からは一人の過去編を開始します。

それにもしても、こんなにたくさんのお気に入り登録や評価を頂いたのが初めてで嬉しそうでどうしていいか分かりません！拙い話で皆さまを楽しませることができるか不安な部分もありますが、頑張りますのでよろしくお願いします。本当にありがとうございました！

もつと違う出会い方をしていたら、何かが変わっていたのかな？

「アアアアア・アイルフィーダ！……！」

そのヒステリックな怒号は静かな校舎によく響いた。

ふるふると震えながら怒りをあらわにする女性教師を前に、私は耳がキーンとするのを我慢して殊勝に俯いていた……いや、本当は笑っている顔を見られないためだけだ。

(『アアアアア・アイルフィーダ』って、『ア』言いすぎだし)

怒られているのは分かつっていても、何があつても笑えてしまうお年頃な私は俯いていたけれど、体が堪える笑いで震えている。

何しろこの女性教師、名をマリアは、全身を常に黒づくめの服装に身を包む厳格でストイックなお堅い人で、風紀委員の顧問教師でもある彼女はそこら中の生徒に些細なことでも注意をする所謂『説教ババア』（年齢的にはまだ20代らしいが）なのだが、今は服装どころか、その髪も顔もいつもはキラリと光る眼鏡のレンズすら全部黒に染まっていた。

なので、黒く染まつていなければきっと顔どころか全身が真っ赤になつているのだろうけど、今はそれすらも分からぬほど本当に黒い。

マリア教師がこれだけ怒っているのだから、こういう事になつた理由は勿論私にあるのだけれど、どうしてかと説明すると、数十秒前に話はさかのぼる。

ここは全寮制の女学校クライン・ステイリア。

女性の社会進出が珍しくなつた昨今、教養と品格を兼ね備え、自立した女性を育成するための学び舎……とまあ、非常に素晴らしい謳い文句を掲げる結構由緒ある学校だ。

そういう理想的な女性を何人も輩出しているし、学校内にその片鱗を見せていく生徒、また、そうとしか思えないようなすごい生徒もいるけど、その大半はごくごく普通な女子たちで構成された普通の女学校でしかないと私は考えている。（まあ、入学試験は難関だけど）

今日は朝から美術で、一日がかりでクラス40名全員で巨大なオブジェを作成するという、美術的センスと協調性や計画性を養うための授業に取り組んでいた。

私と言えばあまり美術は得意ではないけど、一日机に向かっているよりはクラスメイトとわいわい言いながら何かを創っていくという作業は楽しく、主にリーダー格の女子の言つことをはいはいと聞いて、材料を集めたり色塗りをしてみたり奔走していた。

そして、それは私がその過程でバタバトと階段を駆け上がっている時に起こる

オブジェ造りも佳境に入つたが（私には美術的センスはないが、客観的に見て良く分からぬ塊ができつつあった）、黒色のペンキがなくなつたため、私はそれを用務員さんの所に取りに行くこととなつた。

……ここまで聞くと何となくお察しいただけるのではないだろう

か？

私は早くそれを届けたい一心で、『廊下・階段は静かに歩く』という基本的ルールは分かつていても、はやる心でやや小走りに階段を駆け上がっていた。

黒色のベンキがある用務員室は一階、クラスメイト達が待つ美術室は四階。

結構重いベンキが入った缶を両手で持ちながら最初は軽快に駆けあがっていた階段も、二階から三階に至る階段の半ばに差しかかると結構しんどくなり、四階へ向かう段階になるとゼイゼイと息を荒らげたりして……。

まだまだピチピチの17歳。若いはずなのに、私も半ばムキになつていて、歩けばいいのに最後まで走りきつてやると無駄な決意を抱いてしまつたのが全ての原因。

息切れでふらふらとなつていた私は、上がらない足のせいで階段に引っ掛かり思いつきりこけた。

人間、本能的に自分の危機になるととりあえず自分の身を守るもので、顔面強打を避けるため私はその時、何の躊躇もなくベンキの入っている缶を手放した。そうしないと、手で顔や頭を守れないからだ。

ただ、不思議とこうこうときつて冷静なもので、

（あーあ、ぶちまけられたベンキの掃除は時間かかるだろうなあ）

などと呑気に考えていたのだ。

「キャア！――！」

そんな悲鳴を聞くまでは。

ちなみにこの悲鳴は私ではない。膝とか缶を放り投げたおかげで

咄嗟に階段に付く事ができた手は、僅かに痛んだが、私には怪我ひとつないのだ。

じゃあ、この悲鳴は？と振り向いて私、絶句。

想像通りにペンキがぶちまけられていたのだが、同時に後に分かつたのだけれど階段を走っていた私を注意しようと後ろにいたマリア教師が頭からペンキを被つて立っていた。

とまあ、そんな訳で私はそのまま廊下で黒色のペンキを全身に被ったマリア教師に怒られることとなつた。

私としては説教するより先に、マリア教師にかかつたペンキをどうにかすべきだと思うのだけど、怒りのあまり彼女はそれすら考えが至らないようだ。

教師の声の大きさに気がついて怒られている私を、四階からクラスマイト達が野次馬根性丸出しで覗いているのが見えたが、マリア教師はそれにも気がつかない。完璧に頭に血が上っているらしい。

曰く『貴方は元々落ち着きがない』だとか『そんな事では立派な女性にはなれない』だとか、正直余計な御世話だと言いたくなるようなことを言われ続け、比較的彼女に怒られることが多い私は聞きなれた説教を右から左に聞き流すしかない。

それには気が付くマリア教師が目を吊り上げた。

「聞いているのですか！――！」

「はい！」

ずっと俯いていたが、そう怒鳴られて思わず彼女の顔を見てしまい、堪え切れずに吹き出してしまう。

だって、眼鏡をしていたおかげで目の周りだけペンキを避けられたその顔は、まるで笑わせるためだけに化粧を施された変なピエロの様で笑わざにはいられなかつたのだ。

「~~~~~貴方という人はあああああ！」

しかし、そんな風に笑つたらマリア教師の怒りに油を注ぐことは明らかで（だから、顔を見ないように俯いていたのに）、彼女が握つていたペンキで黒くなってしまった眼鏡にひびが入るのが見えた。

（げえ…本格的にやばいかも）

キーンと頭に響く怒号は更にヒートアップして延々と続き、私のクラスのオブジェは結局その日時間内に完成を見る事はなく、クラス総出で居残ることとなってしまった。

クラスメイト達には申し訳なくて謝ったけど、皆、マリア教師のあの姿で笑わせてもらつたと怒られることもなく、更にぶちまけたペンキの後片付けも皆が手伝ってくれたおかげで早く終わった。

あれだけ怒られたことでさすがに凹んでいた私にはクラスメイト達の友情が身にしみて嬉しく、その日の事はそれで全て片が付いたと、寝て起きた次の日には全てを忘れていた私である。

だから、その三日後、マリア教師に呼び出されて、一体何事だろうと思つても、その時の出来事なんて微塵も思い出せなかつた。

「アイルフィーダ。貴方には先日の罰として、授業外に奉仕活動を申し渡します。」

そうして、何を言われているのか分からずに『何の事ですか？』と聞き返してしまつた私は、その後またマリア教師に説教を受けることとなつた。

1・1（後書き）

これから一応本格的な物語の開始です。
イルフィーダの性格が序章とは全く違いますが、昔の彼女はこんな風に明るくて活発な少女でした。そんな彼女がどうしてあんなにうじうじしてしまったことになるのか、その原因は物語を通じて明らかになつていきます。

全然、気が付いていなかつたんですが【小説家になろう】のランキングにこの『愛していると言わない』がランкиングしていることを昨日知りました（笑）

こんなことは初めてで考へが至らなかつたといつか…本当に読んでくださつている皆様のおかげです！ありがとうございます、これらもお付き合いいただけたら幸いです！！

生家を離れ学校内の寮で生活しているため、校外に出るには外出届けというものが必要になる。

基本的に理由のない外出は許されないけれど、休みの日などは買い物などに出かけたりといった理由でも外出届が受理されやすい。もつとも夕刻の門限は非常に厳しい。

私も何度も外出届を提出したことはあつたが、その外出理由に『奉仕活動』と記入する日が来るのは思わなかつた。

「残念だつたな、アイル。今日はお前が楽しみにしていたカフェに行く予定だつたんだろ?」

寮の管理人に記入を終えた外出届を渡しながら肩を大きく落としている。後ろから声がかかる。

そこには同じ年の姉エリーが立っていた。

背がすらりと高くショートカットがよく似合つ彼女は、姉とは言え同い年にも関わらず非常に大人びた容姿をしていて、女子高ではありがちな皆の『お姉様』と崇められたりしている。(しかも、本人も悪い気がしていないうらしく、今やファンクラブ的なものまである)

「笑わないでよエリー。ますます凹むから。いいのお土産は既に依頼済みだし。」

元々、今日は数人の友達たちと新しく出来たカフェでお茶をするはずだつた。

それを何が悲しくて奉仕活動に貴重な休みを費やすなくてはならないのか……自業自得なのかもしれないけど、正直マリア教師を恨

みたくなる。

今までだつて彼女に罰として反省文を書かされたり、校内の清掃をしたり、色々させられてきたが休みを潰されるまでの仕打ちはされた事がなかつた。

まあ、あの『マリア女史真つ黒事件』（新聞部命名）はここ最近で一番の衝撃的な事件ではあつたけれど……だつて、わざとじやないのに。

「そうか。まあ、校外の奉仕活動なんてなかなか体験できるものじゃないし、きっといい経験になるわ。腐らずに頑張るんだぞ。」

根が眞面目で優等生のエリーらしい言葉に、内心閉口しつつも私は受理された外出届の自分控えを鞄に押し込むと彼女に笑顔で手を振つた。

「はいはい。じゃあ、行つてきます。」

そう言つた言葉は自分で言つのもなんだけど、かなり心がこもつておらず、エリーが微妙な顔をして見送つているのに私はペロりと舌を出した。

クライン・スティリア女学校があるのは、
「神を信仰しない陣営」の中央都市・メルトファウストの郊外だ。

現在、この都市を中心として「神を信仰しない陣営」の自治都市は今や三十三に及ぶ。ここまで陣営が大きくなるまでは、それはそれは大変な苦労と時間がかかった。

幼い頃から教わる昔話によると、遙か昔、創世神話の時代にはこの世界は雑草すら育たない不毛の大地だったという。

それを豊かにし、人間が住める環境にしてくれたのが神という存在だ。

しかし、時を経てその神から離反した先人は、当初食べていくのも難しいほど困窮したという。

離反した以上、神の加護のない大地に追いやられる結果となつた先人たちであつたが、その大地は無論、不毛で雨が降らず、更には度重なる自然災害もあり、今まで受けられていた神の恩恵の大きさを実感し、自然の偉大さと人間の無力さを悟つたらしい。

直後は一度は離反したけれど、やはり神の御許に逃げ帰る人たちも後を絶たなかつたということだ。

だけれど、そんな過酷な中でも生きることを諦めず人々を導いたのが、聖女ファミリア・ローズ様。

「神を信仰しない陣営」の人間ならば、知らない人はいない正に伝説の人である。

彼女は特に人知を超えた力を持つていた訳じゃないけど、その素晴らしい人徳と人々に対する献身的な愛情は、彼女が亡くなつて数百年という時を経ても未だに伝説として語り継がれるほどで、当たり前だけど無神教者の集まりにも関わらず、彼女の教えを後世にも伝えようとする集団はメジャーに存在する。

ファミリア・ローズ様の名前をとつた集団の名は【薔薇の会】。

どこの町にも必ずと言っていいほど、その集会場などがあり彼らはファミリア・ローズ様の教えを広めるだけでなく、それを実践すべく無償奉仕を行い、恵まれない人のために生活する場所を提供了た。

と、まあ少し話はずれてしまったけれど、そのファミリア・ロー

ズ様をはじめ偉大な先人たちは過酷な環境下であつても、大地を耕し、灌漑整備を進め、災害に対する対策を進め、段々と自分たちが少しでも住みやすい環境を整えていった。

そして、神の力ではなく、人間の力『科学』や『機械』を用いて今や、
「神を信仰する陣営」の大都市にも匹敵するほどの豊かな都市となるまでに
「神を信仰しない陣営」を発展させていったのである。

以上、「神を信仰しない陣営」の歴史講座終了！

もつとも、私は生まれた時から既に豊かな街並みと生活しか知らないので、それがどれくらい大変だったとか、貧しかったのかも知らない。

だけど、実際には親世代の子供時代くらいまでは結構苦しい生活を強いられていたと授業で学んだ。

…ということは、本当の意味で豊かになったのはここ数十年ということなのだと愚づ。

（数百年間、苦しかったというのに…ここ数十年の間に劇的に変化する何かあつたってことかな？）

授業の内容を思い出そうとするが、授業自体をぼんやりと聞いていたのでそれに思い当たる部分が浮かんでこない。

（うーん…帰つてからHリーにでも聞いてみよう）

成績優秀な姉に聞けばいいかと、安易に考えながら私は見慣れた活気と豊かさに溢れた街並みを横目に田舎地へ足を速めた。

大通りを裏道に入つて、建物と建物の間にできた迷路のような道を地図を頼りに進む。

難解な迷路に道を誤り、その度に近所の人道を聞いて修正を繰り返す事、数回……私はやっと辿り着いた。

一見すると少し大きなお屋敷っぽい外観。

小さな白い花が咲く生垣と、そこからはこじんまりとした白い石造りの古そうな建物と、あまり手入れされていとは言えない色々と生えっぱなしの庭、その庭で走り回る子供たちとその声が聞こえた。

生垣に沿つて歩くと、立派な門とその門に【ローズハウス】という札が掲げられている。

そう、マリア教師が私の校外奉仕活動の場に選んだのは、先程説明した薔薇の会の施設の一つだった。

(詳しい内容は行つてから聞けつて言われたけど、子供がいるつてことはここは孤児院みたいな場所つてことだよね。)

どんな場所に放り込まれるのかと気が重かつた私は、子供の相手くらいならどうにかなるかと少しだけ安堵する。

門をぐぐり、玄関のチャイムを押すと、カラソコロンと可愛らしい鐘の音がして、人がパタパタと近寄つてくる足音が続いた。

「いらっしゃい！貴方がクライイン・ステイリア女学校の生徒さんね。私はレイチエルよ、よろしくね！」

出てきたのはとても溌剌とした若い女性。

白シャツにダボダボの厚手のズボンを履き、茶色の髪は一つに結

ばれ、顔には化粧の一つもしているようには見えず、美しいとは言えなかつたが、その生き生きとした笑顔は初対面の私にすら元気を与えてくれるような感じのいいものだった。

「は…はい。クライン・スティリア女学校から来ましたアイルフィーダ・ファシズと言います。今日からよろし」

「まあまあ…！そんな堅苦しい挨拶は抜きにして早速皆さん紹介しなくちゃ…皆、若いお客様さんが来てくれるつて楽しみにしてたのよ！」

（若い？）

昨日の夜から考えていた挨拶をいい終わる前に、レイチャエルさんに背中を押され建物の中に押し込まれる。

遮られたレイチャエルの言葉に少し疑問を感じながら、何の心の準備もできないまま、色々とぐいぐいと押され私は驚くやら、どうしていいやらで混乱する。

玄関からまっすぐ廊下を進むと、大きな扉を開いてレイチャエルさんが私を中心に案内する。

その向こうにある多くの視線に私はぐっと緊張が押しあがるのを感じ、更に目の前の光景に頭が真っ白になつた。

（え？え？ここって孤児院じゃないの？）

中々大きなリビングらしき場所に、たくさんの人が私の顔を興味深そうに眺めていた。

その中には私の予想通り何人かの子供もいたが、それよりもはるかに多い人数の想像していなかつた人たちがいた。

円らの瞳、小さくて細い瞳、眼鏡で拡大されて歪な大きさを持つ瞳、病気だらうか白く濁つた瞳、うたたねしているのだろうか目脂

が張り付いたまま閉じられた瞳……ずらつと十数人並んだその瞳たちは、それぞれの歴史が積み重ねた個性を持った瞳をしていった。

「はーい！…皆さん、今日は若いお客様が遊びに来てくれました！お名前はイルフィーダさんと仰るそうです。今日はよろしくお願ひしますね！」

レイチャエルさんがビビッている私を一步前に押し出す。

「よ…よろしくお願ひします。」

思わずともつた私を笑う人は誰もいなかつた。だけど、数人の子供が私の言葉に返事をしたけど、ここにいる大多数の人がぽかんと私を見ているだけだ。

「あはは！…もっと大きな声で言わないと聞こえないわよ。ねえ！？」
「はああ？」

レイチャエルさんが豪快に笑いながら、近くにいた人の耳元で叫んだ。するとそれすら良く聞こえていないのか、しゃがれた声が返つてくる。

……

その人はどうみても齡を相当重ねられたご老人にしかみえず

薔薇の会が運営する施設【ローズハウス】、ここは身寄りのない子供を世話する孤児院であると同時に、身寄りがないご老人達も一拳に世話する老人ホームでもあったのだ。

1・2（後書き）

説明ばかりがめこつえに、色々と進んでいなくて申し訳ありません。
早くもひとつドロドロをやみたい！と思っているんですが（笑）

急速な経済的発展で働く場も増え、同時に女性の社会進出も伴つて、家という場所には極論かもしれないけど子供と老人が取り残された。

勿論、それは全ての家に当てはまることがじゃない。

結果として老人が孫の面倒を見る構図が出来あがつて、微笑ましい光景かもしれないけれど、それはあくまで孫の面倒を見る事ができる元氣がある老人のいる家に限られた構図でしかない。

それが出来ない老人という存在は、赤子と同じ、いやそれ以上に介護という名の手間を必要とする事もある。

それは決して悪いことではない、人として老いた時それは当然の事実でしかない。

だけれど、子供と老人しか残つていらない家で、子供も老人も共に人の助けを必要としているのに、その手がないという現状……それは少なからず社会問題として取り上げられさえしている。

(そういうえば、そんな事授業で聞いた気がする。)

子供と老人たちの好奇の目に晒された後、レイチャエルさんに紹介されたローズハウスの責任者だという、ユーナ・レシエットさんから、そういった社会問題に小さくとも助けの手を差し伸べるためにこのローズハウスがあるので、この施設の存在意義を私は聞いていた。

孤児院と老人ホームの混合施設の存在を私は知らなかつたのだけれど、現実にもそれはほとんどないらしい。

どちらか片方に特化した方が色々な事が上手く回るし、施設としても面倒が少ない。

「だけれど、こういう形にして私は良かつたと思つてゐるよ。身寄りのない子供にとつて、ここの大人は甘えられたり、叱られたり限りなく家族に近い存在になるし、大人にとつては子供を見守ることで生きがいを見出したりする。全ての人當てはまることじやないけれど、それぞれが良い刺激を与えあつてゐると私は考へてゐるの。」

「今のお話で言う所の【大人】…といつのは、ご老人達の事を差すんでしょうか？」

「ええ。老人という言葉を使うと、彼らは氣を悪くするから。子供たちと區別するために、スタッフたちは老人たちを総称して【大人】ということが多いの。」

なるほどと話を聞きつつ、私から見れば彼女も十分にその『大人』の一員なのだけれどと思つたりして……。だけど、小さく丸い体に、薄化粧をしてワンピースに身を包み口々口々と明るく笑いながら話す姿は、こう言つては失礼かもしけないがとても可愛らしく、これまでご老人と言う存在と関わったことのなかつた私に親近感を抱かせた。

「それにしてもここがどういう場所か知らされずに来たのでは、驚いたでしおうねえ。まったくマリアも人が悪いわあ。」

「レシエットさんはマリア教師の事をご存じなんですか？」

妙に親しげない方に首をかしげる。

「レシエットではなく、是非ユーナと呼んで頂戴。ええ。よおく知つてゐるわよ。あの子は小さい頃、この近所に住んでいてね。子供の頃は毎日のようにこここの庭で遊んでいたの。」

そう言つてうつそつと茂る小さな森のような広い庭を窓から見つ

めた。

庭は外から見ると手入れのされていない庭の様に感じられたが、こうして屋敷の中から見るとそれはある意味計算されている造りなのかもと私に思わせた。

子供の頃だつたら秘密基地にしたいような背の低い木の影、うつそうと生えているかのように見せつつも子供たちが走り回ることができるように避けられた草、意外と美しく整えられた花々。

(うん。悪くない)

芸術的ではないにしても、遊んだり探索するにはうつてつけの庭に違いない。私は心の中で何ともなしに頷いた。

ちなみに私が今いるのは建物の1階で、ユーナさんの執務室的な場所らしい。大きな窓から庭がよく見え、今も子供達が庭を駆けまわり、それを老人たちが微笑ましげに見守っている。

「こここの子供以外も出入りが自由なんですか?」

「勿論、ちなみに子供だけじゃないわ。大人だつて、学生だつて出入り自由。だから、貴方もここにいるのでしょうか?」

「はあ。」

「ここには誰も否定しない、誰しもを受け入れる場所。実際、ここで生活をしているのは今、ここにいる内の大体三分の一くらいの人数なの。結構、近所の人人が遊びに来てくれるのよ。」

にこにこと微笑みながらそう告げる彼女のこの施設に関する話は延々と続き、それに対しても私はとりあえず『はあ』と気の抜けた相槌を打ちつつ段々とその話に飽きてくる。

なので話半分で聞きつつ意識を他に飛ばし、何気なく窓の外を見ていると視界を横切る異物に目を見張った。
それはまるで一枚の絵。

優しい木漏れ日の中、想像もできないくらい美しい少女が車椅子を押して庭を歩いている。

(……綺麗)

同じ茶色の髪なのに、ふわふわの長い髪はつややかで、深い緑の瞳は大きく長い睫毛に囲まれ、白い肌にバラ色の頬……何から何まで完璧な美少女から私は目が離せない。

「貴方には子供の遊び相手や大人たちの話し相手をしてもらおうと思っているの。学生さんは中々遊びに来てくれないから、きっと喜ばれるわ。」

「あ、はい！」

しかし、私が美少女に見惚れている間も続いていたユーナさんの言葉にはっと我に帰る。

「ちょひど今から昼食なの。食堂に皆集まるから、一緒に行きましょ。」

その言葉に促されて席を立つ、そうしながらちらりとつむつ一度窓を見ると、美少女は既にいなくなっていた。

(私と同じ奉仕活動なのかな?)

だつたら是非お友達になりたいものだと、その時の私は呑気に考えていた。

食堂での食事はまさに戦場の如く……だった。

子供と大人とではなく、これじゃあ子供と大きな子供だと私は思つた。

スプーンを持つことすらできない手で食べる食事は、そこらじゅうに食べかすが飛び散り、介助者の手がないと言つて黙々をこねるお爺さん、食事がまずいと言つて皿をひっくり返すお婆さんまでいる。

子供たちの方が余程、静かに綺麗に食事をしていると、私は始めている光景に戸惑いを隠せなかつた。

そして、それは食事に留まらない、普段の生活においてもやれオムツが濡れた。歩けないから車椅子を押せ。トイレに連れて行けど、文句と言うか彼ら大人の要望は後を絶たない。

それをレイチャエルさんを始めスタッフの人たちは笑顔一つでテキパキとこなしていく。

戸惑つている私の方が物知らずで、これが当たり前のことなのだと言わんばかりに、なんの文句も抵抗もなく。

そんな姿は私にとって本当に尊敬する他なく、私と言えば何もできなまま子供たちの遊び相手や、大人たちの話し相手を務めただけで、酷く疲れてしまつてその日は終わつた。

「今日はお疲れ様！初めてのことばかりで疲れたでしょ？」「

「いえ…本当に何もできなくてすいません。」

来た時と同じ笑顔のレイチャエルさんと、酷く疲れた顔をしている私とでは何が一体違うのだろう？

「何言つているのー子供たちは遊んでくれるお姉ちゃんにはしゃい

でいたし、大人たちは私たちじゃゆつくり聞いてくれない話ができる若い娘さんが来てくれて、本当に喜んでいたのよ。」

「そりだつたらいいんですけど。」

「本当本当！じゃあ、また来週よろしくね！もう、日も落ちるし気を付けて帰つてね！」

「はい。今日は本当にありがとうございました。」

レイチェルさんに一礼して私はローズハウスを後にした。現在、夕食の真っ最中なので、私の見送りは彼女一人だ。

（そういえば、あの迷路の路地をまた帰るのか。迷わずに帰れるかなあ）

疲れた頭でぼんやりとそんな事を考えていた時、夕暮れに長く伸びる他人の影が俯いた私の視界に入る。

それに気が付いてふと視線を上げると、すっかり頭から抜け落ちていたけれど、庭で見た美少女が私の目の前を横切っていた。

私は何も考えず、気が付くと彼女を呼びとめていた。

「あ…待つて！」

その時、私がどうして彼女を呼びとめたのか、その理由を私は自分で答えることが出来ない。

もしかしたら、自分と同じような疲れを感じているかもしけない

少女と一緒に何かを分かち合いたかったのかもしれない。

それともた、ただ目を見張るほどの美少女とお近づきになりたかつただけかも知れない。

だけど、どんな理由が私の中になつたかは定かではないが、何にしても私は【彼女】に声をかけた。

「何？」

振り返る美しい少女、後に私の人生において大きな存在となる彼女との出会いを、私はその後何年たっても鮮明に覚えている。

彼女の視線は愛らしい顔とは裏腹に酷く眼光鋭いもので、私が思わずたじろいでしまったことだって、昨日のことのように覚えてい

る。

「ねえねえ、ニーアはどの辺に住んでいるの？」

「ガティバ地[区]」

「おおー！高級住宅街だ。お嬢様なんだねえ。じゃあ、学校は何処？」

「レンブルトン学園」

「おおー！お金持ち学校！じゃあ

「いい加減にしろーーー！」

淡々と無表情で私の質問攻めに耐えていた、先日ローズハウスから帰りにナンパした美少女ニーアが、我慢できないといつようこ声を荒らげた。

その見た目は本当に本当に愛らしいのに、その大きな瞳から放たれる光は鋭く、荒らげた声はドスが効いていて、お近づきにはなった事がないので正確な所は分からぬけど、きっと札付きの不良にもきつと引けを取らないと私は思う。

ただ、どうやら着ている服装やその所作から彼女がお嬢様なのは間違いないはずで……そのギャップが私には彼女をただの美しいだけのお嬢様じやなく、とても興味深い存在に感じさせた。

ともかくお友達になりたいなど、私は思つた訳だ。

なので、こうして奉仕活動に出向いてニーアに会つ度に私は彼女に纏わりつき、質問攻めにした。

基本的に無愛想だけれど律義な彼女は私の相手をする度にいつも

て噴火する、だけどそした所で私がにんまり笑うだけだと気が付くと、今度は慄然とした顔をぷいっと背ける。

「その表情、かっわいーーさすが美少女はどんな表情しても絵になるわあ。」

「～～～このつお前はマゾか！～！」

私のそんな茶化しに、顔を真っ赤にする一ーアは眼光鋭く口は悪くとも、偽りなく本当に可愛い。

口汚く罵られようともますますにやけ顔の私（うーん、これじゃあマゾと言わても仕方ないのかな？）を、子供たちが興味深げに見つめていた。

「アイル姉ちゃん。どうして、この怖いお姉ちゃんをわざわざ怒らせるのぉ？」

「なー!? 怖い??」

悪意のない子供の言葉に傷ついたような表情を見せる一ーアに吹き出す私。

最初は気が重くて仕方なかつたローズハウスでの奉仕活動も、今となつてはエリーが言つていたようにいい経験だなと思えるようになった。

最初は遠巻きにしか近寄つてこなかつた子供たちに懐かれ、大人たちと会話を続けるコツを覚えてきて、本当に遊びと話相手しかしていなけれど、次第にそれが楽しいと感じられるようになつてきたのだ。

だけど、それは私がとりたてて何かすごい事をした訳でも、私が人格者な訳でもない。

それはきっと、こここの子供と大人たちが誰にでも寛容な事が要因だと思う。

『私はここを誰もが受け入れられる場所にしたいの』

ユーナさんのローズハウスへのそんな信念が、ここに住人たちにきつと伝わっているんだろうなと思った。

そして、私がここに来ることを楽しいと感じられるもう一つの要因が、この美少女ニーア。

彼女は私みたいに奉仕活動で来ている訳じゃなくて、家族がこのハウスにいるから毎週お見舞いに来ているらしい。

そんな彼女とこうして怒鳴られつつも親交を深めていくのが、私の密かな楽しみだったりする。

「あははっ！別に怖くないんだよ。ただ、ちょーっと感情表現が苦手なだけ。そうだ、今日は一緒に遊ぼうか……！」

「おいっ勝手に」

「わあい！！」

私が勝手に決めてしまつと、遊び相手が増えたことに子供たちが無邪気に喜び、この反応にニーアも怒るに怒れなくなり、真っ赤になりながら私を睨みつけた。

(だけど全然怖くないもんね)

ローズハウスに来る事、今回で5回目。（休みの度に来ているので、初めて訪れてから一ヶ月以上がたつ）

その度にニーアと出会い、纏わりつく度に睨まれ怒鳴られて続いている私である。いい加減、彼女の反応にも慣れて、何となくその扱いにも慣れてきた私である。

じりして美少女ニーアに怒鳴られることがローズハウスでの日常になっている私だけれど、実際彼女との距離が縮み、親しくなったかと問われると否と断言するしかない。

はつきり言って彼女のガードは非常に固いのだ。

多分、私に許していい部分と、許さない部分がはつきりしているのだと思う。

質問一つとっても、かんたんに答えてくれることもあれば、きつぱりと言えないと断れることがある。いや、断られる方がかなり多いかな？

きつと彼女に対し興味半分で纏わりついている私を、彼女は本気で鬱陶しがつている。

だけど、根本の部分で律義で優しい彼女は本気で拒否できないんだろうな…想像するのは難しくない。

それが分かつていいなら、ニーアに近づくのは良くない事なんだろとも思う。だけど…と、私は庭で子供たちと戯れながら上方を見上げる。（結局ニーアは子供たちと遊ばなかつた）

ローズハウスの本館というべき食堂やリビング、住人の部屋がある建物の他に、その陰に隠れるように小さな塔があつた。

本館と同じ白い石造りの塔の高さは、三階建ての建物より少し高いくらい。

入ったことはないので、中がどうなっているかは定かではないけれど、あの塔にはたつたひとりの住人しかいないらしい。

それがニーアの家族…私が初めて彼女を見た時、押していた車椅子に乗っていた人

二ーアとその人が親子なのか兄弟なのかも分からず、いくつかの目撃証言からその人が女性だということは知っているけど、ローズハウスにいる理由も、どんな人物なのかも定かではない。（車椅子に乗っている時、私は見ているはずなんだけど、二ーアに見とれていて全く覚えていない）

塔には常に鍵がかけられ、その人はほとんどあの塔から出ることもなく、食事も食堂ではとらないので、子供たちの間でも謎の人物として有名らしい。

散歩も普段はしないということで、私が見かけた二ーアが庭で車椅子を押す姿と言つのはかなりレアな事だったらしい。

（多分、何か複雑な事情があるんだろうけど、なんか変なんだよねえ。）

知り合つてすぐに、とりあえず話題もないでのローズハウスにいる二ーアに家族のことを聞いた瞬間、彼女の表情が普段の不良バージョンよりも凶暴なものに変化した。

いつものように怒鳴りもせず、静かな声と表情がより一層私の恐怖を増幅させた。

『それ以上私のことを詮索するなら、あんたが誰だろうが容赦しない。怪我をしたくなかったら、何も聞くな。』

いやいや…え？ いきなりそんな展開？ と特に深い意味もなくした質問に、あまりに強い拒否と威嚇を受けた私は情けないかな半泣きになるほどビビった。

そんな私の表情を見て二ーアも気まずそうにしていたけれど、それ以降二ーアの家族については怖くて質問しようとも思わなくなつた。

だけど、そう思つ一方でその頑なさが痛々しく、いつも張りつめ

た様な様子の彼女が気になつて、私は鬱陶しがられていくと分かっていても彼女に纏わりついている。

(なんか放つておけないんだよね)

多分余計なお世話なのだろうし、放つておけないと言つても彼女に何ができる訳でもないと思うのだけれど、せめて少しでも気がまぎればいいなと思つたりして……

(あはは、何かこれつて恋みたい?)

なんて、独り言を心の中で呟いていた頃は気楽だった。この出会いと彼女に興味を持った事が、私の運命の転機だとも知らなかつたのだから。

そして、私の運命は音を立てて動き出す。私の知らない遠いところから、少しずつ。

その日、私は異変を感じていた。

だいぶ慣れたローズハウスへ向かう道は、迷路のように相変わらず入り組んでいて、まだぼーと歩いているだけでは迷いうと思つ。その道を白いカッターシャツに膝丈のズボンという、初春らしい涼やかな服装に身を包み、私は気分よく歩いていた。

(雨…降りそうだな)

時刻は正午少し前、いつもならば燐々と太陽の光が降り注いで眩しいくらいだけれど、雲によって太陽は遮られ細い路地は薄暗い。急に天気が悪くなつたため、傘を持ってくるのを忘れたことに凹んで、暗い空を見上げて歩きながら大きくため息をついていると、どんと結構強い勢いで誰かとぶつかつた。

「うわー！」

転びはしなかつたけれど、よろめく視線の先にピカピカの革靴が目に入り、そこから視線を上げると厳つい顔をした大男が仁王立ちしている。

(軍人?)

私は一目見てその男を軍人と断じる。

それはこの男が知り合いという訳ではなく、彼が着てる軍服を一般常識に疎い女学生の私でも知つていたから。

目に眩しいシミ一つない白い生地に、黒と金色の刺繡は贅沢にあ

しらわれ、その腕には「神を信仰しない陣営」の象徴とされる薔薇の花と歯車が絡み合つた紋章が刻まれている。

「「めんなさい。」

ぶつかつたのは私がよそ見をしてたせいなのは明らかなので、すぐ謝ったのだけれど、軍人は無言でじろりと頭から足までじろりと見た後、さっさと歩いて行ってしまう。

それを呆然と見送つて、その後に急速に苛立ちが沸いた。

（何よアレ！ 感じ悪い）

ぶつかつたのは悪かったが、謝つたのだからもう少し反応のしそうがあるのでないかと憤慨する。

まったく気分が悪いと、その時はただそれだけしか思わなかつた。だけど、その後、また違う軍人とすれ違い、今度はぶつからなかつたのにもかかわらず、顔をまじまじと見られる。

「失礼しました」

その軍人はこちらが訝しげな顔をしていると、慌てて謝つて足早に去つて行つたが、軍人がこんな人気のない路地を何人もパトロールしているとは考えられない。

人の顔をじろじろと見るのも、普通に考えてあり得ないだろ？

（誰か探している？）

近くで事件でもあつたのだろうかと不思議に思いつつも、軍人たちが私の顔を見てもスルーしていくことから自分に関係ある事とも思えなかつた。

よつて、さつさと頭の隅にその事を追いやろうとしていた矢先、ローズハウスに入った途端、異様な雰囲気が施設内を覆っていることに戸惑う。

いつもはのんびりした中にも子供と大人の笑い声が絶えないリビングに、今は何人かのスタッフしかおらず、そのスタッフたちも一様に暗い表情を浮かべている。

「こんにち……わ？」

挨拶も語尾に疑問が滲み、何かを相談しあっている彼女たちに私の声は気付かれなかつたようだ。

話しかけられる雰囲気でもなく、立ち尽くしていると、やつとレ切尔さんが私に気が付く。

彼女はその顔に笑顔を浮かべたが、それはいつもの潑刺とした明るいものではなく、すこし苦しそうに歪んでしまう。

「あの…何かあつたんですか？」

「うん…実は一人口ーズハウスから出ていってしまった人がいて帰つてこないのよ。」

「え！？」

重苦しい空氣に包まれていた中で驚きの声は大きく響き、私は思わず口を押さえた。

どくどくと不自然に心臓が鳴りだす。

「「、「ごめんなさい。」

まさか、私がそれ違つた軍人たちはその人を探していた？？と思いつたる一方で、こう言つては何だがここで暮らしている一般市民が行方不明になつたくらいで軍が動くということに違和感を感じた。

軍は普通、一般市民が関わるような事件では出動する」ことはない。普通は憲兵の類がそれにあたるはずだ。

「えっと、それで誰が？大丈夫なんですか？」

感じた違和感はとりあえず置いておいて、私は誰かがいなくなつたという事実に若干パニックに陥つていた。

『じゃあ、いつてくるわね』

声と共に遠ざかっていく背中が脳裏をよぎり、私は大きく首を横に振つた。

「アイルフィーダ？落ちついて？」

レイチエルさんが明らかに様子のおかしい私を心配するように覗きこむ。

自分でもこんなに落ちつかないのは変だと分かつていても止められない。

「それで誰なんですか？私、探しに行きます。」

「そ、れは」

ともかく落ちついていたれなくて、問い合わせるように聞くけど、不思議とレイチエルさんもいい淀む。

そうだ。軍が出張つているくらいなのに、ここにスタッフは誰ひとりその人の捜索に出ている気配がない。

やっぱり何かが変だと思うけれど、それよりもともかく私はその人を探しに行かなくてはと、自分で自分を追い詰めていた。

「早く教えて

「私の家族だ。」

迫る私に気圧されていたレイチエルさんに代わって、背後から静かな声がかかりはっと振り返る。

そこには相変わらず愛らしい容貌に、鋭い眼光を宿した美少女が立っている。・

「ニーア…貴方の家族が！？じゃあ、早く探しに…」

塔の中に閉じこもっている人間がどうして急にローズハウスを出て行ってしまったのか、そんな事を冷静に考える理性はこの時の私には全くない。

ニーアが急に現れた事にも驚かず、ただ、与えられた情報に飛びついで私はレイチエルさんから身を翻すと玄関に駆けだす。だが、それに立ちはだかる様にニーアが前に立った。

「何！？」

止められたことに思わず苛立つて声を上げた。

どうも様子がおかしいと、リビングで相談事をしていたらしさスッタツたちが私たちの周りに集まり出す。

「お前が探しに行く必要はない。既に軍に行方を探させている。」「だからって数が増えて困ることはないでしょ！？」

言いながらニーアの横を通りうつすると、彼女はまた私の進路を遮る。

「あの人は最近はなかつたが、少し前まではこうこうことが良くあ

つた。大体、少し歩くだけで足が覚束なくなるような人だ。いつも
すぐに見つか

「

「だから、心配して探すこともしないの？そんなのおかしい……」

二ーアの首を突っ込む事を許さない強い口調の拒否にせ、今日の
私は負けなかつた。

彼女より強く声を上げて、二ーアが僅かに眉を顰めるのを見ても
彼女に対する憤りしか感じなかつた。

「いつも見つかるからって、それが今回もだとは限らないじゃない
！－誰かがいなくなるって、貴方が思うよりずっと簡単で、あつと
いつ間なのよ？！」

自分で何を言つているか良く分からなくなつていた。

そして、再び過る誰かの背中が遠ざかっていくイメージがちらつく。

(駄目！思い出したら駄目……)

この時の私の頭を占めていたのは二ーアの家族ではなく、消える
ことがない焦げ付いた私の絶望と不安。

「何を言つている？ともかく、落ちつけ……お前が何のことをいつて
いるのか分からぬけど、大体お前はあの人の顔も碌に知らないの
にどうやって探すつもりだ？」

「それはっ

理詰めで言葉を続ける彼女に返す言葉もない。

私を心配して周りに集まってきたレイチエルさんをはじめとした
スタッフたちも、彼女の言葉にうんうんと頷いて私が落ち着くよう

に促していく。

(落ちついて私…大丈夫、落ちつ…)

私だつて落ちつきたい。

だからこそ、彼女たちが促す通り落ちつべく大きく息を吸おつとした瞬間、声が頭の中に響く。

『落ちつけ。アレの事だ。どうせまた自分を心配してほしいだけに決まっている。探しに行くだけ無駄だ。』

思い出したくない無情な声に吸つた息が、ヒュウと変な音になり、吐き出せなくなる。

ヒュヒュと苦しい呼吸に胸を押さええる。

汗が噴き出て、心臓が大きく鳴る。

「おー…しつかりしろ…」

苦しさに蹲つた私の背中に添えられたニーアの手を撥ね退けた。

「もういい…ともかく、私は探しに行く…」

「なつ…」

「私、じつとしてられない…」

ニーアの言葉が返つてくる前に気が付けば、私は走り出してローズハウスを飛び出していた。

背後から私の名を呼ぶ声が聞こえても振り返らない。

呼吸が苦しくても、探す宛ても、探す人の顔も知らないのに我武者羅に走った。

私はともかく、誰かがない事の不安を感じくなかった。帰つ

てこないかもしない人をただ待っていたなくなかつた。

『すぐ帰つてくるから、待つていてねアイル。』

かつてそう言つて私を置いて行つた人がいた。彼女はそのまま今も帰つてこない。

ニーアの家族を捜すというよりは、彼女の幻影から私は逃げ出したのだ。

その後、ビームをビーム通り、どのくらい走ったのか定かではない。

「はあはあはあ

全力疾走のために酸欠の頭では何も考えられず、私が感じるのは繰り返される自分の荒い呼吸だけだ。

それでもローズハウスを飛び出た本当の目的を忘れないでいたから、走りながら視線は歩く人を追つた。

ただ、私が走った場所が悪かったのか、はたまた、雨が降りそうな天気が災いしたか、出くわした人は少なく、その全ては男性。ニーアの家族の数少ない情報によると、その人は女性だったはずだ。

さりにローズハウスに行くまでにすれ違った軍人とも会わない。もしかしたら、もうニーアの家族は見つかったのかもしれない。衝動でローズハウスを飛び出たが、次第に理性が戻つてくる感覚を覚えながら、冷静にそんな事を考えたつつ、私はやっと走る足の速さを緩めた。

「あれ…」何処？」

ただ我武者羅に走ったのがいけなかつたのだと思つけど、全然覚えのない町並みしかなくて途方に暮れた。
しかも、ぽつりと頬に落ちる冷たい感触。

「え、嘘？」

数滴ポソリポソリと落ちてきた後、堰を切つたかのように大雨が滝のように降つてきた。

それで完全に頭が冷えたのか、情けないかな私はオロオロと急にうろたえだす。

（ともかく、どこかで雨宿りしないと…）

傘も持たずに飛び出たため、着衣は薄着だったこともありすぐに水を吸つてべつたりと張り付く。

きょろきょろと辺りを見回して、ふと民家だけれど屋根が張り出していて雨宿りするのに良さそうな場所を見つけて私はそこに再び駆けだそうとした。

「馬鹿野郎！」

と、いきなり怒鳴られて、誰かに強く手を取られ引っ張られた。

「え？えええ？」「ア！？」

後ろを見上げるようにするとそこは私と同じ濡れ鼠になつた二ーアが、怒つた顔をしていた。

驚いた私をニーアは無言のまま、雨を避けるため民家の軒下に引つ張つていいく。

無言の背中が怒つているのは間違いなく、私はどうしたものかと途方に暮れる。

(バカヤロウ…ついで初めて言われた)

元々他人と大喧嘩することもない気性なので、面と向かつてあんな風に怒鳴られたことは一度もなかつた。(マリア教師のお説教は除外)

それを怖いと感じつつも、何となく新鮮な気持ちが胸に過る。

(心配してくれたんだよね?)

多分、飛び出した私を心配して追つてきてくれたニーアのその気持ちが嬉しくて、私は無言のまま背を向ける彼女を見る。

そこで初めてニーアが自分よりも頭一つ分は背が高い事に気が付く。

ニーアは平均的な女性と比べても、きっとかなり背が高い部類に入るのだろう。スタイルがいいので、そんなに背が高いとは思わなかつたが、こうして手を繋いで近くにいるとそれを改めて実感した。ほどのくして軒下に到着すると、やっととめどない雨粒から逃れることが出来て、ほっとすると同時に急に張り付くシャツが不快に感じられ、雨に奪われた体温のせいで寒気が体を走る。

思わず愚痴の一つも出そうになつて、ニーアが沈黙したままで、そんな事を言える雰囲気ではないと気が付いて飲み込む。

代わりに何はともあれ聞いておかなくてはならないことを確認す

る。

「ニーアの家族は見つかったの？」

彼女はちらりと私の方に目をやつたが、すぐに顔を逸らす。かなり怒っているようで、僅かに顔が赤い。

「ああ、お前が出ていったのと入れ違いくらいのタイミングで、見つかったと報告が入った。」

「そう良かった。」

それが聞いてとりあえず安心して、次に私は勢いよくニーアに向かつて頭を下げた。

「『めんなさい！私が勝手に怒鳴って、出ていったせいでニーアに余計な面倒をかけました！』

「まったくだ。良く分からぬことを喰いてお前が出ていったせいで、私が悪者だったんだぞ？」

私ではなく正面を向いたまま、ニーアが顔をしかめる。

「へ？ どういう意味？」

「レイチェルを始め、私が冷たいからお前が傷ついて出ていったんだから、私が探しに行くのが道理だと散々責められた。」

その言葉にぎょっとして目を見開く。

「いやいやいやいや！ あれは私が勝手に逆上しただけで、ニーアが悪いことは一切ないよ……寧ろ私が謝らないといけないくらいだし。

「

言葉は段々尻つぼみになる。

思い出すだけで數十分前くらいの自分の物言いや行動が恥ずかしくて、どうしようもなくなって縮こまってしまいます。

だけど、一見するとあの時の私とニーアの喧嘩は、ニーアが私を突き放して私が逃げ出したように見えたんだろう。

そのせいでレイチヨルさんたちに責められて、こんなところまで私を追いかけてぐことになつたニーアに本当に申し訳ない気持ちになつて頃垂れる。

「まあ、私も言い方がきつかったし、お相子つて事にしないか？」
「でも、それじゃあ」

どう見ても悪かつたのは私だ。

「お前は私の家族を心配してくれただけだし、結果はともかく、謝つてもううようなことは何もしてないだろ？ 別にすぐにこうして捕まえられたし…な？」

顔は正面を向いたままだけど、視線だけこちらに向けて照れたようないーアの笑顔。

（わー笑ったの初めて見た！）

何かもつ可愛いとしか言ひよつのないその笑顔に、妙なテンションが高まるのを感じる。

そんな私の様子に訝しげな表情を浮かべるニーアとニーマーマしてしまう私は、その後雨が止む少しの間だけ、特に会話はなかつたけれど穏やかな時間を過ごした。

何故だかどんな質問に答えてもらつた時よりも、彼女との距離が

少しだけ近づいたような気がした。

雨が止んでとりあえずローズハウスに戻ると、レイチャエルさんたちが安堵した顔で私たちを出迎えてくれた。

彼女たちにも心配をかけてしまったと、ひとしきり謝る私に怒つた様子もなくみんな一様に私に何事もなかつたことを良かつたと優しく言つてくれる。

何だか泣きたくなるような温かな気持ちになつた私だけど、ふいにかけられた問いかけに体が固まつた。

「でも、どうしてあんな急に怒り出しちゃつたの？」

「そういうえば、とりあえずニーアちゃんが悪いんだと決めつけちゃつたけど、良く考えればそういう会話じやなかつたわよね。」

何気ない言葉だろうけど、その言葉に私は声が出なくなるのを感じた。

これだけ迷惑をかけたのだから、ちゃんと理由を話すべきだし、ニーアを一方的に悪者にしたままではやはり駄目だ。

「ぐりと唾を飲み込んで、その間に答えるとだけ、急激に襲ってきた緊張に喉が渴いて言葉が出てこない。

「あ…」

「それよりとりあえず着替えとかないか？私たち、ずぶ濡れでこのままじや風邪をひく。」

隣にいたニーアの言葉に、レイチャエルさんが大きな動作で慌てだ

す。

「とりあえず大きなタオルを借りているけど、私たちは全身がずぶ濡れでタオルだけではとてもじゃないけど、乾く状態ではなかつた。」「本当！－そのままじゃ風邪ひいちゃうわね。ついでだからお風呂も入つて温まりなさい。女の子一人くらいなら一緒に入れる広さはあるし、いつでも入れるように準備しておいたの！」

そう言つていつもの彼女に戻つて澆刺とした明るい笑顔で私たちの背中を押す。

「風呂！？私はいい！？着替えだけ貸してもらえれば」

「何言つているの！こんなに顔も冷たくなつてているわよ？もう準備万端なんだから、それを無駄にしないで頂戴。」「

何故だか急に焦りだしたニーアの頬を触つて大げさにリアクションをして、有無を言わせずレイチエルさんは私たちを浴室に押し込むと、着替えをとつてくると行つて出ていった。

取り残された私たちに何故だか微妙な沈黙が落ちた。

ローズハウスの浴室に入ったことはないが、住人が何人か一緒に入れるように脱衣所も広々としている。

たくさんのタオルや子供たちの玩具があり、ここで住人達が生活をしていることを感じさせた。

私は体が冷え切つていて、お風呂に入るのは正直ありがたいので、扉の方を向いたまま固まつたニーアを不思議に思いつつ、濡れた服を脱ぎながら話しかけた。

「ニーア、さつきはありがと。」

「あ……！？」

問い合わせた私を振り向いた瞬間、ニーアは思いつきり顔を背ける。

「どうしたの？」

「い、いいいや何でも！…っていうか、ありがとうって何だ？」
「さつき、私が言いにくのに気が付いて話をえてくれたでしょ
う？助かったよ。」

「まあ、誰だつて言いたくないことの一つや二つはあるから、は、
ハハハ」

乾いた笑い声と、急に焦ったような様子のニーアは未だに洋服を脱ぐ様子はない。

だけど、洋服が濡れて透けてしまって下着の線どころか色まで分かつてしまつ。（ニーアは清楚な水色だ）

何処となくいつもと違う様子のニーアを観察しながら、私は女同士と言えども、お嬢様の彼女は誰かと一緒にお風呂に入るという習慣がないから照れているんだという結論に達した。（ちなみに私は寮で共同風呂なので全く抵抗はない）

しかし、彼女も私と同じ状態なのだし、やはりお風呂に入つた方がいいに決まつてゐる。

私はとりあえずシャツとズボンを脱いで下着姿になると、彼女の背後から洋服を脱がせにかかりた。

「な！何をつ？！」

「だつてニーア、全然洋服脱がないじゃない！服着たままお風呂は入れないよ？」

背後からまるで私に襲われるようになつた形になつて、暴れだすニーア。

真っ赤になつて焦る様子は普段の彼女とは全く違つて面白い。

「私は風呂には入らない！！レイチエルが持つてくれる服に着替えるだけだ！！」

「何で？折角だし一緒に入ろうよ？」

「はいらな　おい、待て！！本当に脱がすな！！」

抵抗は驚くほどに激しかったが、幸いに今日彼女が着ていたのが後ろにチャックのあるワンピースだつたこともあり、背後からさつさとチャックを下していたので、脱がすのは結構容易だつた。パサリとワンピースが落ち、その瞬間ニーアの抵抗が最大になる。彼女の背中に張り付くようにして服を脱がせにかかりついた私は、その瞬間バランスを崩しニーアに凭れかかってしまう。

そのせいでのニーアの体がぐらりと揺れて床に私ともども倒れこんだ。

『うわー！』

一人の人間が倒れこむ音が響き、冷たくなつた肌と肌が触れ合う。私はニーアが下敷きになつてくれたおかげで何処も痛まなかつたが、下敷きにしてしまつた彼女は自分の重みで痛いに違ひない。

「ごめ

」

急いで起き上がり、ニーアに今日何度もになる謝罪の言葉を途中に私は言葉を失つた。

私は今、どういう風に倒れたかは定かではないけど、仰向きに倒れ込んだニーアに馬乗りになる形になつていてる。

起き上がつた私は真つ赤になつて言葉を失つていてるニーアと一瞬だけ視線が合い、その後、彼女の体に釘付けになつた。

濡れた服の下から透けていた水色のブラ、それが包んでいるはずの柔らかい胸…のあるはずの場所から目が離せない。

言つておくれど、それは私が同性にそれにつ興味があるとか、そ
んなんじゃ……ない。

(ない!)

何が『ない』かといえば、女性ならば大小の差はあれど、誰しも
が持つているはずの胸の膨らみ。

それがニーアには皆無で、代わりに明らかに胸板だとしかいえな
い筋肉の上にボールのようなものが胸の代わりになつていて、ブラが
それを包んでいる。

胸が今まで出会つたどの女子よりもないといつ事實に、一瞬、あ
りえない想像が頭をよぎる。

(ニーアはもしかして……いや……これはいまはやりのパットの類に
違ひない!)

胸のボリュームを出すための偽乳の存在は女学生の間では結構メ
ジャーだ。

それとは明らかに違つと思いつつも、私は無理やりそう自分に言
い聞かせた。

この時の私は本当にパニック状態だったのだ。

慌ててとりあえずニーアから離れなくては、そして、自分のあり
えない想像を払拭して一緒にお風呂に入らなくてはと、立ち上がり
うとしたけど力が入らず、とりあえず後退して体をどかそうと後ろ
に手をついた。

「うわあ
「きやあ」

その瞬間、手に何か柔らかい感触とこれまで茫然自失していた二

一アが叫んで急に立ち上がり、彼の腹部に乗つかっていた私は床にぐるりと転がった。

床は脱衣所と言つこともあり、固い素材ではないので私はすぐに座り込んだまま体を起こし、そして、すぐ傍に立つていたらしい一アのちょうど股のあたりが田の前に来る。

「やあ……」

そして、それを見た瞬間に喉の奥から、今まで自分でも出したことのないような悲鳴が押しあがつてくるのを感じた。

(な……なんなのよ、この膨らみ……)

羨ましいくらいの白くて細い御足よりも、私の思考を奪つたのはブラとお揃いらしきショーツに包まれた女性にはない膨らみ。

頭は真っ白になつたけれど、たつた一つの事実が明確になつて私を襲つた。

男――――

その答えに辿りついた瞬間、私は押しあがつてくる悲鳴を吐きだそうとして、それに気が付いた一アに口を手で押さえられた。

「ま……まで――これには事情があるんだ」

「ん~――」

女子になりすましていた男子にどんな事情があるかなんて、この時の私の知つたことじゃない。

ただ、美少女だと思っていた相手が男で、今一人は互いに下着姿でこんなに近くにいて、もう何が何だか分からなくて、ただただ混

乱するしかなかつた。

実はこの女装美少女（いや、美少年になるのかな？）ことニア
が、後に私の夫になる世界王フイリーだなんてこの時の私には全く
想像できない事であった。

1・6（後書き）

何だか色々すみません！途中から丸わかりだったとは思いますが、美少女ニーアこそが、将来の世界王陛下だつた訳ですが……一応、理由があつて女装しています。決して趣味じゃないですよ、下着は女物着たりして本物志向ではあるようですが（笑）見た目は完全に美女、心は普通の男の子！

なんか序章と違つて変なラブコメみたいになつてしましましたが、第一章はこれにて終了。次はまた現在に戻ります。話の形態としてはしばらくは現在と過去を交互にしていこうと思つています。次は思いつきでドロドロです！

昔々、大地は命が育まれることのない死の大地だった。その大地に神が恵みを与え、動植物が息づき、人間が生まれた。人間は神を敬い、神もまた人間を慈しみ、その中で一人の女性に神の血を引く子供を受けた。

神と人間の血を引く子供、それが初代世界王レインバック・ヴァトル

彼は神と同じ、金の髪に青にも緑にも見える澄んだ瞳、そして、その左胸には神の子の証である太陽の紋章が刻まれていたという。以後、彼の血を引く世界王は代々、同じ髪と瞳の色を有し、そして必ず太陽の紋章がその左胸に刻まれている。

「太陽は私たちの神の本当の姿だとと言われ、光と命を象徴しています。太陽の紋章が刻まれているという事は、世界王が神の力を身に宿している証拠とされています。」

（左胸… そういえば何か紋章みたいなものがあつた気がする）

とはいっても、夫… もとい世界王フイリーの紋章を見たのは、彼がまだニアと名の少女の皮を被つていた頃。

彼を女の子だと思いこみ服を脱がせたあの時だけだ。

最近、昔の事ばかり考えているので、もう十年くらいの前のこと

だけじすぐりに思い出せた。

(まあ、あんな強烈な事そつそつ忘れられないし)

男性に対して免疫がない訳では無かつたけれど、女の子だと思い込んでいた相手が男だったのだ。驚くなといつ方が無理。

(あの後も大変だつたんだよねえ)

「オホン！聞いていらっしゃいますか？」

更に過去に意識を飛ばそうとしていると、ずいづとファイリーンの化粧の濃い顔が目前に迫つて、私は咄嗟に体を引く。

「は…はい」

田つきが怖い彼女相手に、大人しく返事をすると大きくため息をつかれる。

私は今、ファイリーンから神のことについて講義を受けていた。

く神を信仰しない陣営への私は当然神の事など大して知らずに育つていてるけれど、世界王の妻となつたからにはそう言つてはいられない

詳しく述べると一般教養くらいの知識は身につけると、ファイリーンから今日も今日とてスバルタを受けていた。

とはいいつつも、ここ数日はこんな風に過去に思いをはせることが多くなり、講義にも丸つきり身が入つていないので、彼女がどんなにスバルタだらうと何一つ知識として実になるものはない。

その事を申し訳なく思つていても、やはり、暗にでるなど言われ

た舞踏会のために必死で練習することなどできず、フィリーの様子から考えてもこれからずっと何を勉強しようとも、それが役立つ日が来るとは思えない。

結果として本当にやる気のない私が完成してしまったのだ。最初はそんな様子の私に口酸っぱく小言を言ったファイリーンも、何を言わっても平然としている私に何も言わなくなつた。

ただし、彼女もここで講義をするのが仕事なのでその役割は果たしてくれているし、私もそれを放棄することはしなかつた。

何しろファイリーンの講義がなくては、私は日がな一日、何もすることがなく後宮に引き籠もつているだけになつてしまふから。例えそれが昔から苦手な勉強や、身につかない礼儀作法であつたとしても…どんな形でも他人と関わらず、自分の殻に永遠に閉じこもつていては、私は生きながらに死んでしまうだらう。

そんな暗い考えを頭の中で何度も繰り返しては、鬱々とする日々が日常となりつつあつた。

「えつと、一つ疑問に思つたのだけれど聞いてもいいですか？」

小言を続けるファイリーンを気にすることなく、私はふと今の講義で気になつた事を口にした。

「あら、質問なんて珍しいですわね。どうぞ？」

「神、神っていうけど、貴方達の神の名前はないの？」

彼らの信じているのが唯一神であり、その他に登場する神がいなから、神と言えば『神』しかないのだうけど、神にだって名前くらいあるだろ？

そう思つての質問だつたけど、私の問ひにファイリーンはきよんとして首を傾げた。

「名前…ですか？私は知りません。というか、恐らく神に名前はな
いように思いますわ。神は神ですもの。」

貴族のお嬢様然としているファイリーンだけど、その知識はそこの博士を名乗る人より上だと聞いている。（自称だけれど）
それもかなりの書痴で、様々な知識に精通しているらしい彼女が
こういうのだから、実際に神に名前はないのだろう。

別に元々大して興味がないことなので、ふーんとしか思いようが
なかつたけど、何となく気になる。

「では、神についてはここまでにして、次はダンスの練習に入りますわよ！…」

何故だか私のやる気の無さを感じ取っているはずなのに、それに比例してダンスに対してだけは彼女のやる気は上昇する一方だ。
前はそれに反発したり、対抗意識を燃やしていたけど、最近の私は本当に何も感じなくなりつつあった。

「ダンスはいいです。それより神の話をもう少し聞かせてもらえないでしようか？それともし神について私も読める本があつたら貸してもらいたいのですが。」

「どうしてですのー？」

とたんに目を吊り上げるファイリーンに、私はぼんやり笑つて見せた。

「ファイリーンの話がとても興味深かったから、もつと知りたいと思つて。それに私、〈神を信仰しない陣営〉の人間じゃないですか？早くここに慣れるためにも、色々知りたいんです。お願ひします。

「

ファイリーンは傲慢なお嬢様っぽいけど、勉強しようという意欲を見せると、それがどうやら嬉しそうだと知ったのはここ数日。

「…まあ、それならば仕方ないですね。」

怒ったような素振りを見せつつも、顔は微妙に笑っている彼女が微笑ましい。

多分、彼女は師として仰ぐのには十分な人物なのだと、彼女の見方が私の中ではかなり変わりつつある。

嫌みや挑発の応酬さえないように私が心掛ければ（ファイリーンからあつても、それを返す気力が今の私にはない）、彼女と付き合うことは大きな苦痛となる事はなかつた。

「ですが、分かっているのですか？誕生祭は3日後、もう時間ががないのですよ？」

その言葉には答えない。否、答えられない。
本当は言つてしまえばいいのに。

『陛下から舞踏会には巫女様をパートナーとすると言われた』

そう言えば、ファイリーンだってこんな風にダンスダンスと言わなくなる。

だけど、私はまだそれを告げれずに入る。

言つてしまえばそれを認めることになる…往生際悪く、私はまだ自分が王妃としてすら認められていない事実を受け入れられていなんだ。

そんな自分の諦め悪さが、底意地の悪さが憎い。

いつかは認めなくてはならない、いや、それより先に現実がそれを認めざるを得ないよう私を追い詰める。

だけど、そうなった時、私は自分が大きく壊れてしまうような気がして、怖くて自分でそれを認められないのだ。

妻としての存在が疎まれているのは分かつてから、せめて、王妃としてこの場所にいる意味が私の支えだったのだから。

2・1（後書き）

短めで申し訳ありませんが、第一章開始です。
鬱々としたイルフィーダに更なる試練、最大のライバルが登場する予定です！ドロドロの予感（笑）

ここまで読んで下さった皆様、お気に入り登録・評価をして下さった皆様のおかげでポイントが1000を超えた！私としてはすごい快挙すぎて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです！ありがとうございました！

拙い作品ではありますが、また感想やご指摘を頂ければ大変励みになります。あまり心が強くないので、お手柔らかにお願いしたいですが、是非よろしくお願いします！

ファイリーンは講義が終わった後、すぐにお願いした本を手配してくれたらしく、ルッティから寝る前に本を渡された。

古く使い込まれているが立派な造りで分厚い本は、綺麗な挿絵も多く、ぱみぱらとめくった印象では神に纏わる伝説などを集めたものようだ。

あまり堅苦しい内容ばかりでなく、これならば私にも読めそうだ。時計を確認するとフィリーがいつも来る時間よりも大分早いので、行儀が悪いとは思いつもベッドに寝転がりながら本を読みだして数分後、

「アイルフィーダ様。陛下がお渡りでござります。」

ルッティからそんな声がかかって慌てる。

最近、特にこちらに来るのが遅いと思っていたから油断していた。急いでベッドから飛び出ると本を片づけて、シーツの皺を伸ばし、鏡を覗きこんで変なところがないか確認する。

最後に深呼吸一つして、数十秒後、ドアが音を立てて開くと同時に頭を下げる。

「おかえりなわーませ

まあ、どんなに慌てて色々整えたところで、何かが変わる訳じゃない。

後は彼が私を抱きしめて、あの言葉を語つて寝るだけ。

この間までは辛くともまだ、その辛さに甘さが伴っていたことが、今となってはただの苦痛に過ぎなくて私はさすがとすんでくれればいいと、立ち上がったまま動かない。

だけど、今日は彼の方から、いつもとは違うアクションが起る。

「今日はこれを見に。」

そういうて机に結構大きい箱を置く。
白い箱に金色の豪華なりボンが掛けられたそれは、見るからにプレゼントだ。

『君に』と言わしたことから、私宛のプレゼントと書かれていたのだろうけど、そんなものを貰うとは予想したことがなかつたので驚く。

そのままどうにも現実を受け入れられない私に、フイリーの方がしごれを切らして、机に置いた箱を私に直接押し付けてくる。

「ほら」

「あ、はい。えっと、ありがとうございます。」

中身が何かは分からぬけれど、大きい箱を両手に抱えてとりあえずお礼を言つ。

箱は大きさの割に軽い。

(???)

私は疑問符を頭の上に何個も飛ばす。

プレゼントを貰う理由と状況が分からない。

更にはそもそも実はこれがフイリーから貰つ初めてプレゼントであると思い至つて、嬉しいやら困惑やら、どうも反応に困る。そのまま固まっていると、フイリーがまだこちらをじつと見つめたままなのに気がつく。田が合つと、不機嫌そうな顔で一言。

「開けないのか？」

「あ、はい！」

なるほど、わざわざ手渡しでくれたプレゼントをすぐに開けないとこうのは、失礼というものかもしれない。

慌てて抱えたままだった箱を机に置いて、光沢のある高級そうなリボンに手をかけて、自分の手が震えているのに気がつく。

（えええ？ 私、嬉しそぎて震えてる？）

咄嗟に気が付けていない感情を体は正直に表しているようで、顔の表情筋も笑いたいのに笑えないらしく、微妙にひくついているのに気が付く。

震えるくらい嬉しいのだけれど、照れているのと、その感情をフイリーに知られてドン引きされるのが怖くて、理性が色々なことを制御しようとしているのに制御しきれていない… そんな感じ。

そんな自分でも呆れるくらい面倒くさい感情に閉口しつつ、ともかく、何でもないふりをしてどうにか箱を開けた。

「……ドレスですか？」

かくして、箱の中から出ってきたのは、光沢のある柔らかそうな素材の布地。

見るからに高級そうで、箱を開いたはいいけれど触れるのにも躊躇してしまう。

後宮に入つてから、ドレスと言われる類の服を日常着として着せられてきているが、着慣れない上に、平凡な容貌にドレスが似合わないのも十二分に理解しているので、私はドレスと言つよりはなるべくワンピースに近いものを好んで着ている。

そもそも「神を信仰しない陣営」で一般的な服装は、基本的にシ

ンプルで簡素、更に女性もズボンを履くことが当たり前なのに對し、
「神を信仰する陣営」においてはそれは野蛮とされる。

「」では上層階級の女性ならばドレスを着ることが当たり前で、
それが豪華であればあるほどステータスであるとされている。
私も王妃として様々なドレスを用意されているけれど、そのどれ
もフリルやレースをこれでもかという程使用され、輝く宝石やビー
ズがそこかしこに付けられている。

正直、全く趣味でないというのが本当の所で、確かに綺麗だと思
うけれど、それが似合う似合わないは別問題。

平凡で貧相な私には、そういう飾り立てられたドレスは基本的
に似合わないと誰もが分かりそうなものを、これが王妃として正し
いドレスだと押しつけられる。

でも、やっぱり似合わないから着たくないくて、結局は実家から用
意してきたワンピースばかりを着てきた。（その度にファイリーン
には馬鹿にされたけれど）

だから、フイリーがプレゼントしてくれたのがドレスだと察して、
嬉しいと思つ反面、それを着こなせるか全体像を見る前から非常に
自信がなく、心が萎えた。

おかげでドレスが入った箱を前に、私は再び立ちつくす。

「出さないのか？」

「は、はい、いえ、すぐ……」

そんな私にじれったさを感じたのか、再びフイリーが口を開く。
それは敢て疑問形にするのも不自然なほど、明確な命令形で、私
は急かされるようにドレスを箱から取り出す。

さらりとした涼やかな布が音を立てて、寝室の柔らかな光の中に
金ともベージュとも言えぬ色が煌めいた。

全貌が明らかになつたドレスを見て私は一瞬息をのむ。

(綺麗…)

そのドレスは私が「」にきてからイメージしてきたドレスとは違つた。

細身のAラインのドレスは、スカートの部分はフワリとしているが、だけれどフリルやレースではなく、絶妙なバランスで布をまるで花弁のように縫い合わせており、更に細かな刺繡によって派手ではないが纖細で美しい模様が描かれている。

シンプルで露出が少なく、更に気品があつて美しいドレスに、あまり洋服に興味のない私も胸が高鳴った。

思わず声が出ないくらい見とれていた私だけれど、フイリーはそれを悪い方にとつたらしい。

「気に入らないのか？」

その言葉にはつとして、とりあえず首を横にブンブンふる。

「いいえ…あのとても素敵なドレスで気に入りました。」

本当ならばもつと感情をこめて喜びをアピールする所かもしれなければ、どうにも照れが先行してしまい言葉は酷く他人行儀なものになつた。

あまり喜びすぎてフイリーに引かれるのもやはり怖い。

幸いに私の不器用な喜び方でも、彼は幾分か不機嫌な顔を緩めてくれる。

「なら良かつた。こっちのドレスはメルト・ファウスト育ちのお前の感覚では抵抗あるだろ？から、そういうドレスなら気に入ると思つた。」

「えら・んでくれたの？」

「フイリーの言葉に信じられないような気持で問うと、彼は顔を歪めた。

「昔からお前の服のセンスは正直言つて質素すぎるんだ。今度の誕生祭であんまり貧相なものを着られても困るからな。」

そういうて悪態をつかれても、今田は堪えない。

だつて、それって要するにこのドレスを選んだのがフイリーだと認めたということ。

ただでさえ綺麗だと思つたドレスが、ことさらに大切に思えて私は言葉詰まらせた。

こんなことでこんなに喜んでしまうなんて、今の自分の弱さと言つが、妙な感受性の強さに、馬鹿だなと思つ。

更にさつきまでは単語だけであるでロボットの様に言葉を発していた彼が、昔までとは言わなければ私と会話をしてくれることも嬉しかつた。

フイリーの行動や言動に、こんなに一喜一憂するなんて大人にもなつて、学生の頃と私は何一つ変わりない。

だけど、今はその言葉に喜びを感じていたかつた。

「ありがとうございます。」

でも、それはフイリーにとつてはきつと重荷にしかならないだろうけど、せめて感謝だけはちゃんと伝えたいと、久しづりに彼の眼を見でお礼を言った。

それが多分、珍しかつたのだろう。

フイリーはただでさえ大きな瞳を更に大きくさせて驚いた表情を浮かべる。

(「いつ顔をすると、昔と変わらない。」)

今となつては美青年と言つても差支えないだらうけど、私から言わせると美少女だつたころの面影が消えないままだ。
今だつて女装させたら、体格的な所はどうしようもないけれど、少なくとも私よりは美女になるに違いないと確信している。
そう思うと何だか笑えてしまつて、気が付くと小さく吹き出してしまつた私を見て、何か不機嫌にさせてしまつたのだらう。フイリーが何かを我慢するように顔を背ける。

(あ…)

それを見て、嬉しくて高揚していた気分が急速に萎んでいく。
何が気に障つたのか分からぬけれど、それまであつた和やかな雰囲気が一気に霧散して、いつもの重い沈黙が私たちの間に戻る。
そして、沈黙に耐えがたさを感じたのか、フイリーは何の脈絡もなく唐突に

「愛している」

そう言つて、いつも通りドレスを持ったままの私を抱きしめてベッドに入つていぐ。
それをいつも通り何も言えないまま私は見送る。

(私は何を間違つたのかな?)

そう心の中で問いかけても、あたりまえだけど誰も答えてはくれない。

私が今できるのは、せめて先程の楽しい名残を抱きしめるよつこ、元のドレスを抱きしめることだけだつた。

アイルフィーダ

それは神の子を宿した女性が愛した伝説の花

何気なく目に入ったページに自分の名前があった。

フイリーからドレスを賜るという珍事の翌日、ファイリーンの講義も今日はなく、午前に誕生祭での注意事項をルッティと確認してからは特にやることも無く、ぼんやりと過ごしていた午後。ファイリーンから借りた本を暇潰しに読んでいた私は、自分の名前にそんな意味があることを初めて知った。

「ルッティ、私の名前って花の名前だったのね。」

やることも無いのに、傍に控えてあれこれと世話を焼いてくれるルッティを振り返ると、彼女は優しく笑顔を浮かべた。

「ご存じありませんでしたか?一ひらでは女の子の名前として少な
くない名前です。」

「うん。」

本には花の絵も描かれている。
白にうつすらと青を乗せたような色で描かれている花は、見た目

は薔薇のよつだけれど、薔薇よりも花弁が多く柔らかい感じで描かれている。

「アイルフィーダは想像上の花なの？」

「はい。実際にはない花です。伝説によりますと、神が悪魔の毒に苦しんだ時、アイルフィーダの不思議な力によつてその毒は癒されたとか。以降、アイルフィーダは神、ひいてはその子孫である世界王を支える巫女の象徴とされてあります。」

その言葉を聞きながら、私は本に描かれたアイルフィーダを指でなぞる。

(巫女の象徴：彼女にならこの花もよく似合つ)

自分と同じ名前の花といつこにはあまりに可憐な花が、『彼女』の象徴であると聞くと途端にしつくじとくる。

そのことに凹みながらも、表にはおぐびにも出でず本を読み進めていると、部屋の外から誰かがドアをノックする。

ルッティがそれに対応すると、彼女は戻ってきて私に告げた。

「アイルフィーダ様。巫女がお会いしたいと仰つておりますが、どうされますか？」

聞き取りやすい声でゆつくつと告げられた言葉。

だけれど、その言葉を頭が理解するのにゆつに数十秒かかった。

(巫女が私に会いたい?)

彼女と会つたことがあるのは、実際には数回。

彼女は私のことなどほとんど記憶にも残つていなかつ。だけ

ど、会つたことは少なくとも、私は彼女のことによく知っていた。

それも知りたくないほど知りすぎて、彼女を嫌いになるほど

ぐつと握った拳の中で汗が滲む。

本当は会いたくない。

私と彼女が会つて何になるのだと、追い返したい気持ちは十分にある。

だけど、ここで彼女から逃げたと思われるのも嫌なのだ。

弱い私と意固地な私が戦うためにたっぷり数分沈黙した後、私はルツティに巫女と会うことを了解する旨を伝えた。

どう見ても不自然に考え込んだ私にも、ルツティは怪訝な顔一つせずに対応してくれる。

心配されるのも嬉しいけれど、今はそんな風に放つておいてもらえるほうが助かつたので、口には出さないけれど私は彼女に心の中だけでお礼を言った。

【巫女】とは何か？

その起源は神に子供を授けられた女性、要するに初代世界王の母親であるとされている。

後に聖母様と崇められるその女性の名は、ヴィルシェリア。

世界の王の母であると同時に、神を守る守護者で戦乙女の名を同時に冠する伝説の存在。

彼女亡き以後、神と世界王を何人からも守り、公私にわたくて補佐する役目として、世界王が選定される度に、その対となるよう

巫女が選ばれるようになる。

そして、巫女が生んだ子供が次の世界王となる。巫女と呼び方は違えども、要するに巫女も世界王の妻と同義なのだ。

もつともその存在はく神を信仰する陣営へにとつて世界王と同列の地位を有し、後宮ではなく巫女のための離宮があり、彼女はそこで暮らしている。

はつきり言おう、王妃なんて私だけじゃなくて、歴代の王妃その大半が皆名ばかりの存在だったに違いないのだ。

実際、世界王の本物の妻は巫女…その存在であることは、誰が見ても明らかな事実としか言いようがない。

しかし、不思議な慣例というものがあり、世界王と巫女は一人の間に子供を作り、巫女が生んだ子供でなければ世界王になれないといつのに、結婚はしない。

それはその始まりが母と子であつたことに帰来するのか、その辺りの事情に明るくない私には計り知れない部分があるのだけれど、世界王に即位したと同時に新しい巫女も選ばれ、そして、結婚しながらままで子供を作り、その子供が次の世界王として即位するまで二人は世界王と巫女として共にあり続ける。

世界王は基本的には王妃と後宮を持つものらしいが、巫女を想い、妻の一人も娶らなかつた世界王も實際にはいるらしい。

要するに舞踏会でフィリーと踊るのだって、王妃ではなくて巫女がその役割を担うのが正しいといえば正しいのだ。

ちなみにもちろん私がこちらの嫁ぐより前に巫女はフィリーの隣に当たり前のように存在していた。

そして、フィリーと私の結婚式にも参列し、彼女から祝福を受けた。

神々しい巫女の衣装を身に纏つた彼女は、花嫁衣装を着た私より

もはるかに美しく、世の人は世界王の妻が巫女でないことを私に聞こえるように嘆いた。

彼女と最後にあったのはその時だと思うのだけれど、それ以降、一度だつて会いたいなどと言われたことはない。

(一体、何の用なんだろう?)

私は巫女の所に行くために着替えるのをルッティに手伝つてもらひながら、悶々とそれについて考え続けるがやはり何も思い当たる節がない。

ちなみに会いたいと言つてきたのは向こうの元、ビルして私が赴かなくてはならないかとか、そういうツッコミせ心の中でしまつておいてほしい。

じついう堅苦しい場所はともかく、地位や礼儀といつもの元つるさい。

世界王のただの妻という私の立場より、巫女という世界王に匹敵するただ一つの存在の彼女のほうが、ここでの立場はかなり上。その彼女に私のところに来て頂くなど、はつきりいつて失礼千万、不敬罪で首が飛んでしまうくらいのことらしい。(ドレスだつて失礼のないように着替える必要があるのだ)

そんなの会いたいほうが会いに来ればいいんじゃないと、私なんかは思つてしまふのだけれど、それで私の周りの人迷惑がかかるには申し訳ないし、どうせ暇なのだから出向くのは億劫ではなかつた。

しかし、着替えを手伝いながら、後宮から出るとこうことにルッティが難色を示していた。

「今まだアイルフィーダ様の警備が万全でない以上、後宮から出ることとはやはりお勧めいたしません。」

着替えはすみ、今度は鏡台に座つて髪を結いあげられる。ルツティはブラシとピンを使って、魔法のような手際でそれを完成させた。

「そつはいつても、行くつて言つたものを今更行けないとは言えないし、巫女に来てもらつ訳にもいかないでしよう?」

「そつなんです。大体、慣例はあるかもしませんが、アイルフィーダ様のご事情を鑑みれば、巫女の方から来るべき所です。用があるのもあちらですし：一体、何の用なんでしょうね?」

「そんな事、私もわからぬわよ。ともかくお待たせするのも申し訳ないし、さつさと行つて帰つてしましょう。」

全体像を鏡で確認して準備は完了。

「しかし……」

私の侍女という立場で責任を持つ彼女としては悩ましいといひうなのだろうが、実際、私としてはそんなに自分に警備を裂く必要があるのか首を捻るところだ。

確かにく神を信仰しない陣當^{アリヤ}の王妃^{アリヤヒメ}というのは前代未聞だらうし、私が誹謗中傷されているのも事実なのだろう。

だけど、ここはあくまで城の中なのだし、しかもこんな白昼堂々と私を襲う輩がいるとは思えない。

幸い巫女の離宮は後宮とはさして離れていないといひし、私としてはそのことに何の不都合さも感じないのだが、さて出陣だとばかりに立ち上がる私をルツティはなおも引き止める。

「お待ち下さい! いかれるにしても、ともかく一度陛下に許可を頂いてからでないと。」

「城の中を移動するだけで陛下の許可がいるの?」

「こんな言い方をしたくないけれど、いい加減言いたくなる。

「申し訳ありません。ですが、アイルフィーダ様のことに関しては全て陛下の意意志を確認するように申し付かっております。」

部屋から廊下に続く唯一のドアの前に立たれてそう言わわれては、私も折れる他ない。

「はあ……じゃあ、その血を巫女側にも伝えておいてください。陛下にも早く許可をもらってください。」

待たせて後で難癖をつけられても面倒だ。

「はい！では、もう少々お待ちください」「し・失礼いたします！アイルフィーダ様、巫女よりお迎えの使者がいらっしゃいました。」

ルツティがフイリーの許可をもらひべく部屋を出ようとした時、別の侍女が何だか慌てた様子でドアの外から声をかけてきた。
ノックもなくいきなり声をかけてくるなんて、教育が行き届いている後宮の侍女にはあるまじき行為だけれど、その言葉にルツティも驚いたらしく、それに気が付かぬままドアを開ける。

「迎えですって？」

「はい。あのえっと…アイルフィーダ様の事情を察して、巫女の護衛騎士ランスロット様が離宮までご案内すると書いてお越しなのです！」

現れた侍女は私も見知っているいつもは落ち着いた感じの女性だ

が、彼女もどうしたらしいかわからずオロオロしている。

「どうやら命を狙われる危険がある（笑）私を慮つて、巫女が私の移動に際して自前の騎士を護衛につけてくれるらしい。

至れり尽くせりで怖いくらいだ…だけ、そうまでして彼女は私に会いたいところである。

「と、ともかく陛下の指示がなくてはアイルフィード様は動かせません。騎士殿にも少しあ待ちたいだいて」

「と言われても、もう来ちゃってるんだけど？」

その声に侍女たちのやつとりを見ていなかつた私も驚いて振り返る。

侍女二人があんぐりと口を開けて驚いたその先に、一見して騎士だと分かる服装をした青年が一人。

見事な銀髪は長いまま垂れ流し、切れ長で聰明そうな瞳は深い青、派手な配色を有するその青年は、なるほどその派手さに見合つ美しい造形をしている…が、

（騎士つていう割には軽薄そうな男ね）

いい大人が『来ちゃつてる』なんて言葉を堂々と使うなと、私は男をじつとりと睨み付けた。

だが、男は睨み付けた私の顔を別の意味にとつたらしい。

「いやあ、そんなに見つめられると困ります。どんなに焦がれても、貴方は王の妃なのですから。」

などと妙に芝居がかつた言葉でおちやらける。

その言葉に怒りと呆れで米神と口元がひくつく。

かくして、この男、侍女が言った通り巫女付き騎士ランスロット

への最初の印象は最悪の一言で済んだ。

まるでお伽噺から飛び出た王子のよう、ランスロットは優雅に一礼すると口上を述べた。

「お初にお目にかかります。私は巫女直属騎士ランスロット・ロバルテ。王妃様におかれましては」機嫌麗しく。お皿通り叶いまして恐悦至極に存じ奉ります。」

顔を上げるときりりと光る笑顔。

私はそれを見て、彼は職業を間違えたに違いないと心の中で断言する。

(これだけ顔がいいんだから、役者にでもなればよかつたのに……いや、演技は下手だからそれも難しいのかな?)

言つてはいること非常に礼儀正しいのだけれど、その言葉を告げる声や態度が薄っぺらべ、私は自分自身がひどく軽く扱われている気がして、気分が悪くなるのを感じた。

別にこの派手な男に敬われたいとか、傳かれたいとか、そういう事じやない。

ただ、いつも薄っぺらい態度で接するのならば、それに相応した軽い言葉で話せばいいのだ。

妙に丁寧な言葉を軽い声で話されるから、馬鹿にされていくような、見下されているような気がして、嫌な気分になる。

(そもそも、この男は最悪なこと、それを無意識じゃなくて……私の機嫌を損ねるためにわざわざつぶやく。)

挑発されているのだろうかと、頭の片隅で考える。

この挑発がランスロット個人のものなのか、はたまた巫女から男を通じてされているものなのか、相手の意図が分からぬまま、こんな安い挑発にのるのも馬鹿馬鹿しい。

すうっと私のどこかで温度が下がるのを感じた。

「こちらこそ初めまして。アイルフィーダと申します。本日は巫女様のところまで護衛して頂けるとか、『多忙の中お手間を取らせてしまい申し訳なく思つております。』

笑顔を浮かべ、スカートの裾を両手で持ち、僅かに腰を落とす。その角度や、頭を下げるかどうかなど、自分と相手の地位を考えて変化させなくてはいけない、この一連の動作もファイリーンのスバルタ教育の賜物で完璧だ。

そんな上っ面だけ完璧な王妃の私を見て、ランスロットも更に笑みを深くする。

「これはご丁寧に。何、私は巫女付きなので、巫女が動かなければ大した仕事もない暇な身ですのでご安心くださいませ。それより王妃様こそ誕生祭が近い今お忙しいでしょ？」
主の我儘におつきあい頂き申し訳ありません。」

表だけ取り繕つて空言で謙虚に装い、互いの腹を探るかのような言葉のやりとりが、笑顔の間に火花となつて散る。

その火花がえた訳ではないだろうけど、そこでそれまで呆けていたルツティが我を取り戻し、弾かれたように叫んだ。

「ランスロット様！」ちらは後宮、それも王妃様の自室ですよ？！」

いつも静かに話す彼女が真つ赤になつて声を荒らげる様子に、隣

で一緒に呆けていた侍女も目を丸くする。

それに一瞬気まずそうな表情を浮かべた後、ルッティは冷静を取り戻すかのように深呼吸を一つすると言葉を続けた。

「貴方様が誰であろうと、後宮に陛下以外の殿方が入ることは許されません。すぐにござ退出下さいませ。」

「まあまあ、侍女殿。そんなかたいことを仰ら

ランスロットは人好きしそうな笑顔を浮かべながら、ルッティの肩に手を置いて彼女を宥めにかかるとする。しかし、

「汚らわしい！触らないでください。」

その手をルッティがピシャリとはねつけ、手を落とされたランスロットも上っ面が剥げて目を見開く。

(『汚らわしい』なんて、中々強い言葉を使つたわね)

いくらランスロットが軽薄な若者そのものだとしても、いくらなんでも『汚らわしい』とまでは思わないし、それは思つても口にするのは少々憚れる言葉だ。

そんなこと侍女の鏡のようなルッティが分からぬはずはないのだが、ランスロットの突然の登場に混乱しているといつことなのだろうか？

常とは違う彼女の態度に、私も心の中で首を傾げた。

「巫女からの使者であるというのであれば、取次の間でお待ちください。これ以上、ここに屈座ると仰るのであれば、後宮の護衛兵を呼んで貴方を排除するだけです。」

小柄なルッティがランスロットと私の間に立ちはだかり、毅然と言ひ放つ。

「それは困りますね。畏まりました。すぐに退散いたします。」

上つ面を取り戻したランスロットは、困ったと言いながら顔に笑顔を張り付けたまま両手を上げて降参のポーズをとる。

そして、一礼をして頭を下げたまま視線だけを私に向ける。

「それでは取次の間でお待ち申しております。お早いお越しを…巫女は王妃様と違つてお忙しいので、あまり時間がいございません。」

丁寧な言葉を軽い声で紡ぎながら、最後のところだけ少し声のトーンを落とし、私を見る目に剣呑な光が宿る。

その瞳の光はランスロットが、ただの顔だけの男だということを否定するだけの強さがあった。

（あら、そういう顔もできるわけね。）

その瞳が含むところに氣が付かないふりをして、私はのんびりとそんなことを考える。

軽薄なだけな男の軽口に閉口し続けるのと、悔つては痛い目にあうからと氣を張り続けていっているのでは、どっちが楽なのだろう？

まあ、ランスロット相手に喧嘩をするわけじゃないのだから、そんなことを考えなくともいいのかと思い直したが、巫女に会う前から疲れてしまつて、私は大きく息を吐いた。

ランスロットが告げた通り、巫女は分刻みのスケジュールを無理やり開けて私と会おうとしているらしい。

遅れる旨を伝えた後、それでは困ると巫女サイドから強く拒否されたのがその証拠だ。（向こうが会いたいと言っているのだから、

その言い分には理不尽さを感じないでもないけれど）

それならばルツティも自分が同行するということを条件に、フイリーへの報告を後回しにして私の久々の後宮脱出はなされた。

かくして、私は巫女の離宮へと案内されている。

先導するのは無論、使者を買って出ているランスロット。

群青のマントを翻して颯爽と歩く様子はさすがにさまになつていて言わざるを得ず、通りすがる城仕えの女性たちがうつとりとした目で彼を見送るのも当然なのだろう。

しかし、一方で男性からは憎々しげな視線が多く向けられ、その視線の強さから同性にはやはり好かれないタイプなんだろうなと想像がついた。

まあ、彼の後ろに私がいることに気が付くと、皆一斉にく神を信仰しない王妃に対する嫌悪だったり、侮蔑を隠しもしないので、彼に対する城の人たちの反応は大体しか分からない。

「王妃様は結構度胸が据わつていらっしゃるんですね。」

離宮への入り口は後宮と同じく、一つしかないらしい。

そこに辿り着くと、ランスロットは入口の前で立ち止まり急にそんなことを言い出した。

人通りが多かった後宮からここまでくる廊下とは違い、離宮へ続く入口である大きな扉の前は警備の兵が一人立っているだけ。

それも職務に忠実なのか、ランスロットに敬礼をした後は微動だにする様子もない。

「どういう意味ですか？」

「いいえ？ここまで来る間、どう見ても好意的とは言えない視線を送られたり、陰口を叩かれているのに気が付いていない訳じゃないでしょう？そこまで鈍感だつたら、逆に尊敬しちゃいます。」

だんだん私に対する敬語は崩れ、攻撃性が増していく。

だけど、やっぱり『しちゃいます』はないだらうと閉口した。

「だから、てっきり俺に助けを求めるか、彼らを黙らせるように命令するかと思ったのに、貴方は彼らの前をオドオドもせず堂々と歩いた。中々立派でしたよ。」

言つてぱちぱちと手を叩きあふする男に、勿論怒りを感じた。だけど、

(それだけ私がここではなめられているつてことよね)

そう思うと怒氣が削がれ、逆に呆れる気持ちが強くなる。
侮られたり、卑下されることには慣れていだし、そう思つている人たちの鼻を明かすのは痛快で嫌いじゃない。

でも、私が鼻を明かしたいのはこの男のではないんだ。

「ランスロット様、アイルフィーダ様に失礼じやないですか。」

ルッティが私に代わつて怒つてくれるのも嬉しいけれど、今はそれではランスロットの挑発に乗る訳にはいかない。

「いいのよルッティ。この方が言つていいのは間違つていないわ。
……それで、助けを求めたら助けてくださいました？」

私の言葉にランスロットの顔が爽やかなまま、凶悪な色を纏うの
を私は確認した。

この男は私がこういうのを待つていた。そして、次の言葉を言い
たくて仕方がなかつたんだ。

「名譽ある巫女直属騎士である私が、『たかが』王妃を守る義理は
ないでしょ？」「？」

巫女の周辺にいる人にとって、王妃わたりという存在は邪魔で仕方がないのだろう。

それもく神を信仰しない陣営へいの王妃だ。

だからこそ、巫女の権威を振りかざし、私を貶めたくて仕方ない。
そうしないと我慢ならない……そういうことなんだろう。

(なんて性格が悪い男)

だけど、この男がどう思つてしようが、何を言おうが関係ない。

(要はこの男の言葉が、巫女の言葉かどうかつていう事)

ランスロットが個人的に私を嫌つてゐるのならば、大した問題で
もない。

ここに来るまでに私を睨みつけたり陰口を言つた人たちと、それ
は同じ。

だけど、巫女までもが同じとなれば話は別だ。

「それもそうですね。それより、巫女はお忙しいのでしょうか？お待

たせしては申し訳ありませんわ。」

何しろ彼女は私の夫の、たつた一人の想い人。

私にとつては恋のライバル…まあ、最初から負けは確定なのだけれど。

だけど、彼女にだけは自分の弱みを見せるわけにはいかないのだ。

彼にとつては最大限の攻撃にも動搖する様子のない私に、たじろぐランスロットを尻目にさっさと歩き、扉の前で開門を要請する。

「王妃イルフィーダ。巫女のお召しにより参上しました。お取次ぎをお願いいたします。」

視線は下げる。背筋は曲げない。

ファイリーンとの講義で、威厳を保つために重要なことは姿勢と心持だと彼女は断言していた。

そんな精神論なの?と苦笑したものだけど、じつして実際に威厳というものが必要な場面に直面してそれが正しいことがよく分かった。

(巫女と対面する少しの時間だけ…頑張れ私)

小さく心の中でうつぶやいて、重い音を立てて閉く扉を私はくぐった。

私の身長の二倍はある大きな扉が開いた瞬間、光が溢れた。

眩しいと細めた瞳で扉の向こうの景色を認識して、ここが自分が今までいた城の中と同じ場所とは思えなかつた。

広がるのは植物の緑と、空の青の美しいコントラスト。私が今立つてしているのは、さながら空中庭園。

城の高い位置に建てられている離宮は、その大半が美しい庭園で、遮るものない空はただ只管に青く果てしない。

沢山の側室たちの部屋を一堂に集めるべく存在する後宮は、広い敷地でも部屋の数が多く、ぎゅっと詰めこまれたような閉塞感を覚えるが、さすが巫女一人のために用意された離宮は大した広さはなくとも後宮にはない解放感があつた。

庭園を道なりに歩けば、見たことも無い色取り取りの花々、鳥や蝶、せせらぎを奏でる小川まである。

それを横目にたどり着いた先には、こじんまりとしているが贅を尽くされたと分かる美しい離宮が鎮座している。

多分、何とか様式みたいな伝統ある造り方で建てられているのだろうが、生憎そういったことに疎い私には綺麗な建物だなあぐらいの感想しか抱けない。

「王妃イルフィーダ様をお連れいたしました。」

離宮の前でランスロットが高々にそう告げると、離宮の扉が開き、そこから続く廊下に十数人ほどの侍女がずらりと並んで頭を垂れ、私たちを出迎える。

頭を下げる角度は直角で、彼女らの表情は私からは全く窺い知る

ことはできないが、なるほどここまで来る間に出会った城仕えの人たちよりは『教育が行き届いている』訳だ。

(本心はどうだか分からぬけど?)

そんな意地の悪いことを心の内で考えながら、嫁いできて私も疑り深くなつたものだと自分で自分が悲しくなる。

故郷を離れ、誰一人味方がないとわかつていて嫁いだつもりだつたけれど、想像と現実はやはり違うものだと痛感させられたこの数か月。

誰も頼ることができない孤独感、明らかに異分子と認識せざるを得ない環境、隠されることのない嫌悪と侮蔑。

それに対する自分の感情の動きが、嫁いだ当初とは明らかに違つと気が付いた。

少し前は自分が変われば周囲も変わるものではないかと色々試してみたりもしたけれど、やはり「神」という存在を隔てた私と彼らの溝は、私の努力程度では埋まるものではないのだと実感させられた。結果として私は少し変わつた。

人を始めから疑つていれば、何か言われても傷は浅い。

自分のことを他人事のように考えておけば、自分の傷と向き合はずに済む。

多分、無意識下で私はそういう風に感じて、それを実行している。人間というのは気が付かぬうちに、こんな風に自分の心を守るよう防衛手段をとっているのだと、自分のことながら感心してしまう。

(まあ、そういう自覚があるうちは、まだ大丈夫よね。さて…今日のメインイベントよ)

前を先導していたランスロットが膝をつき、斜め後ろを歩いていたルッティが大きく頭を下げる。

私もファイリーンに教えられた最大級の礼をとつて、頭を僅かに下げ、スカートの裾を持ち、腰を少し折つて、彼女から話しかけるのを待つ。だけど、膝はつかない。

「頭を上げて、アイルフィーダ。」

高くもなければ低くもない、聞き心地のいい声が私の名を呼ぶ。「急に呼んだりして、ごめんなさい。でも、どうしても貴方に話しておきたいことがあって。」

巫女様と崇め奉られていようと、昔から飾り気のない氣さくな彼女の気性は変わらないらしい。

自分が悪いと思ったことはきちんと謝る様子に、ランスロットのような嘘は感じられない。

だけど、だからこそ彼女という存在は厄介なのだ。そう思いながら、私は頭を上げ彼女の顔を見て笑つて、考えてきた挨拶の言葉を述べる。

「こちらこそ、ずっと」挨拶もしないまま本日に至りまして申し訳ありませんでした。リリナカナイ様。」

巫女リリナカナイ・デュヒ

彼女という人物を的確に表すと、清く正しく美しい完全無欠の聖女様。

言つていて非常に嘘っぽい言葉に聞こえるかもしぬないけれど、

彼女は実際に容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群と、本当に非の打ち所がない。

更に言えばこれだけ色々な天賦の才的なものがあれば、それを鼻にかけて性格の一つや一つ悪くなりそうだけど、彼女に至つてはそれもない。

「様付で呼んだりしないで！昔みたいにリリナつて呼んで？」

大人の女性のように強く正義感に溢れ、明るく優しく、それでいて子供のように無邪氣で天真爛漫。

せめて、物語の恋のライバルのように鼻持ちならない高飛車なお嬢様（例えばファイリーン）みたいだったら、彼女を憎むことは簡単だつた。

「ですが……」

「確かに私と貴方は、フイリーの巫女と王妃っていう関係になつてしまつたけど、それは政略上仕方のないことだもの。むしろ、貴方を巻き込んで私もフイリーもとても心を痛めているのよ？だから、ね？私とフイリーだけは貴方の味方だから、そんな他人行儀にならないで……」

せめて、彼女が私を傷つけようとしているのなら、反撃することは簡単だ。

だけど、彼女は昔に少しだけ付き合いがあつただけの私を守つと、助けようとしてくれるから、私は何もできない。

（だって、これで私が嫌味の一つでも返そつものなら、私が悪役じゃない？）

いや、実際にはそうなんだろうなと思つ。

これが巷に溢れる夢物語なら、主人公は何もできない根暗王妃じやなくて、綺麗で優しい巫女様だ。

背後で巫女に使える人たちもそう思つてゐるに違ひない。

振り返らなくてもビシバシと感じる、警戒するように私たちのやり取りを見つめる視線がそれを物語つてゐる。

それに気づかずに私を気遣うリリナカナイにヤキモキしつつ、彼らはそんな彼女に心酔し、私を悪役に仕立てたくてたまらない。

だけど、それも無理のことなのだと諦める。

悪役になるのは簡単だったけど、私だってこんな風に無条件で私を心配してくれる彼女を昔から苦手とは思つていても、心底嫌いにはなれない。

だから、苦しくても笑う。

「うん。リリナ、分かったわ。」

「良かつた！私も昔みたいにアイルって呼んでいいよね！」

そう言つて輝かんばかりの笑顔を見せる彼女に、ノロといえる人間がいたら是非お目にかかりたい。

リリナカナイのことを心底嫌いになれないと思つ。だけど、やっぱり嫌い。

でも、それは彼女自身が嫌いというわけじゃない。

私にはない全てを持っている彼女、フィリーに本当に愛されるいる彼女、そんな彼女を妬ましいと思う卑屈な自分が嫌い。だつて、それは戦わずして負けていることと同じ。

何だかんだで結構負けず嫌いな私は、彼女から逃げたくない、こうして性慾りもなく彼女に立ち向かつたりするのだけれど、やっぱり一度だつて彼女に勝てた試しはない。

時間がないという割には、リリナカナイは優雅に私を午後のお茶に誘つた。

離宮の一室、多分こうして来客などがあるときに使つ場所は、明るい日差しが差し込んで、とても気持ちいい。

そこで私は同じテーブルで、お茶とお菓子をリリナカナイと囲んでいる。

私の背後にはルッティが、彼女の後ろには年配の侍女と反対にとても若い侍女の二人が並んでいる。

侍女二人、特に年配の侍女はにこやかに給仕してくれたが、その目がリリナカナイを傷つけたら許さないと如実に語つっていて、少々笑えた。

昔から彼女は老若男女問わず好かれていた。

「それにしてもこの前見た時にも思つたんだけど、随分髪が伸びたのね。昔、最後に会つた時と全然印象が違つてびっくりしたわ。」

話があると言つたきり何も切り出してこないリリナカナイに、私はとりあえず無難な世間話を持ち掛けた。

今は長い髪だけど、昔の彼女はショートカットだったはずだ。私と彼女は昔に何度か面識はあっても、深い関わりがあつたわけじゃないので、共通の話題が大してないけれど、この話題にリリナカナイも笑つた。

「うん。この髪と田は巫女の証みたいなものだから、周りが五月蠅いの。」

そう言つて、彼女は陽の光にキラキラと光る銀の糸のように艶のある髪を摘んだ。長さは彼女の腰ほどはある。ちなみに瞳の色は薔薇のような赤。

一般的には髪も目も黒や茶が大多数な世界分布率から言つて、この組み合わせは非常に珍しい。

そして、それは巫女に選ばれるための必須条件でもある。

「だけど、本当は私の髪、すごい癖があるから伸ばすと面倒な。寝癖もすごいし。侍女の皆がものすごい気合い入れて手入れしてくれているから何とか見れるけど、私一人だったら大爆発してる。」

「そうなの？」

私も髪は比較的長いほうだけど、そんな悩みは持つたことはない。（嫁ぐ前は基本的にいつも一つに結んでいただけだった）

「私、結構面倒くさがりなの。基本的には洒落とかにもあまり興味ないし。髪を伸ばし始めて結構経つけど、やっぱり昔みたいなショ

ートカットが一番楽だつたと今でも思う。」

「まあ！何を仰いますか！！リリナカナイ様がお持ちのよつた美しい髪を伸ばさないだなんて、もつたいないですわ！」

「え？でも、やっぱり色々面倒だもん。」

年配の侍女が奢めるように言った言葉に、頬を膨らませるリリナカナイ。

私より四つ年下だつた彼女も立派に成人したはずだけど、美形といふのは大人になつてもこんな表情が様になるから恐ろしい。

そこから話はしばらくリリナカナイの意外な一面とでも言おうか、愛らしく可憐な容貌とは裏腹によく言えば活動的、悪く言えばじや馬だという事実に終始した。

「でも、フイリーが髪が長いほうが好きだつていうから…長くてもいいかな？つて…ふふ、なんか恥ずかしい！」

「ええ、よく似合つているもの。」

なのに惣氣に行き着いた話の結末を苦々しく思いながら、顔を赤らめてはにかむりリリナカナイに笑顔でいれる自分に拍手を送りたい。それにも、フイリーが髪が長いほうが好みだとは意外だ。

昔はショートカットの女の子の頃が大好きだとか、私にさんざん持論を展開していくのに、好みが大人になつて変わったのだろうか？

「どうかした？」

ふと、そんなどうでもいいことに気を取られて黙り込んだ私を、リリナカナイがテーブルを乗り出して覗き込む。

間近まで迫つた珍しい赤い瞳にぎょっとする。

実はいろいろと思い出すことがあって、私はこの赤い瞳が好きじ

やない。

「なんでもないわ。それより、今日は時間がないって聞いたわよ？
話があるって言っていたけど、何だった？」

「あつーつさ…あのね？」

本題に話を進めた途端に妙に歯切れの悪くなるリリナカナイ。
その表情に僅かに暗い影が落ちることが気になった。

「何か言いつらうことなの？」

とはいえ、彼女と私の共通点はフィリーしかない。多分、その関係の話だとは思うのだけど、私には全く彼女が何を話したいか見当がつかない。

かくして、僅かに逡巡した後、彼女はドンと机に手をついて私に言い放った。

「『めんなさい…』」

「……へ？」

いきなり謝られて訳が分からぬ。

背後の侍女たちも、何が始まつたのかと驚いた表情を浮かべている。

「明後日のフィリーの誕生祭なんだけど…その夜には舞踏会があるの。そこでは本当は王と王妃、フィリーとアイルが躍るはずだったのに、頭の固いお爺さん達が

「私じゃなくてリリナに躍るよつてお願いしたんでしょ？」

何か酷く申し訳なさそうに謝る彼女に、それ以上言わせたくない

て私が彼女の言葉を変わった。

それをどうして知っているの?と言わんばかりに口を大きく開けて、リリナカナイが私を凝視した。

「知っている。陛下からこの前言われていたから。」

それを聞いて大きな目を更に見開いた後、彼女は大きく息を吐く。しゃべり方や仕草など色々と幼い印象を受けるリリナカナイだけれど、こうして大人びた表情を見ると彼女もこの数年の間に大人になつたのだと実感させられた。

「そう。私から話すつていつたんだけど、フィリーは自分が悪者になつてくれたんだね。」

「リリナ?」

「私とフィリーは、本当はアイルに舞踏会に出てもううつもりだつた。ううん、明後日の誕生祭はアイルを王妃としてきちんと周知させる絶好の機会だもん。私たち一人で貴方をく神を信仰しない陣営の世界王妃としてきちんと認めをせる予定だつた。」

言いながら頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜ、綺麗にセツトされた髪をぼさぼさにする。

「なのに!頭の固いお爺さん達が!!私達の予定を悉く潰したのがめんなさい。私もフィリーもこっちに来てもう七年も経つのにまだある人たちに対抗できないでいるの。」

「いやつ、そんな謝つてもらひつことじや……?」

しゅんと萎れた花のように頃垂れるリリナカナイに私が慌てている。背後の侍女たちの視線は怖いし、何より彼女の告げた事実に混乱する。

「えつと、要するに本当は私が舞踏会にも出る予定だつたけど、それを重臣の方々が反対したつてことでいいのかしら?」

「重臣じゃなくて、あんなの頑固爺どもでいいのよーー。」

子供のように反論された言葉はとりあえず無視して、そこではてと思ひ至る。

「だけど、陛下はそんなこと一言も仰らなかつたけど。去年まで貴方が出ていたから、今年もそれで行くみたいな言い方だつたわ。」

「フイリーの悪い癖ね。自分が悪者になつても、貴方に余計な心配をかけないようになしたんだと思つ。アイツつてば昔からやつなのよ、自分よりもいつも他人ばかりを心配する。」

そう言つて仕方がないなといつよいに苦笑する彼女の表情は慈愛に溢れ、二人の一人にしか分からぬ絆を見せつけられる。少なくとも私は彼のことをこんな風には言えない。

「でも、私はね、アイルに全部話したほうがいいって言つたの。重臣がアイルを王妃として認めたくないと思つていたり、色々な人が貴方を傷つけようとしているつて知つていたほうが良いと思つたら。どんなに私たちが庇つても庇いきれない部分はある。それだったら、アイルにも全部了解の上で一緒に頑張りたいと思つたから。」

それはそりだらうなと思つ。

後宮に閉じ込められていよいよとも、やっぱり周囲の私に対する偏見や風当たりは感じざるを得ない。

「だから、私から話すつて言つたのよ。フイリーが言つたのではア

イルだって頷かないわけにはいかないでしょ？私が事情を聞いたらアイルは嫌な気持ちになるかもしれない。だけど、アイルが嫌だと感じたら、私相手だったら怒つたり断つたりしやすいでしょう？」

リリナカナイは私が反発するかもしれないと分かった上で、この話を自分から言おうと決めていたらしい。

潔癖で優しい彼女らしいと思つたけれど、私は自分の気持ちが塞ぎ込んでいくのを感じた。

（フィリーから言われようが、リリナカナイから言われようが、私に否だといえると思つていいの？…思つているのよね、彼女は『何も知らない』んだから）

心の中でそう呟いて、私は膝の上に置いた拳を握りしめた。

「でも、怒られたって、断られたって…私は最終的に私とアイル、一人でフィリーを支えていきたいって思つていい。」

「え？」

思わず言葉に私は声を漏らす。

「く神を信仰しない陣営へを離れる時、話したよね？フィリーと私は、二つの陣営をいつか手を取り合つていける存在にしたい。その一つの手段として、く神を信仰する陣営へを中から変えるために私たちは世界王と巫女になつた。」

一人は歩み寄ることない両陣営を、強いては世界を一つにするために自ら苦行を選んだ。

その決断を知っている私は、彼女の言葉に頷く。

「でもね、それは私たちが思っている以上に大変で、もうあれから七年も経ったのに私たちは重臣の意見一つ変えられない。自分の無力を実感するばかりの数年だった。今のアイルみたいに風当たりも強かつたしね。でも、やつとここまで来た。」

まっすぐに赤い瞳に射抜かれて、私はどきりとした。

彼女の穢れのない瞳は何もかもを見透かしてしまいそうで、見つめ返すのが怖いくらいだった。

「私やフイリーはく神を信仰しない陣営の人間じゃない事になっているから、私達を通してく神を信仰しない陣営を理解してもらうには限界がある。それを公表するのは現状では難しいしね。でも、とりあえずく神を信仰しない陣営の人間だつて人間だと思つてもらうところから始めなくちゃいけない以上、実物を用意する必要があつたの。」

「それがく神を信仰しない陣営の王妃ということか。だけど、私一人が来たところで何が変わるっていうの？」

「分かつてる。だからこそ、私もフイリーもアイルを大々的に発表して、これから色々な公式行事にも参加してもらうつもりだつたの……なのに」

まあ、世の中そう上手くはいかないものだろう。

フイリーからは全く聞いていなかつた、彼らの事情というものを目の当たりにして私もなるほどと納得する部分が大きい。

く神を信仰しない陣営から押し付けられた私に対して、妙に厚遇されている（警備が厳重だつたり、侍女の質が良かつたり）と思つてはいたけど、それにはそれなりの彼らの思惑があつたというわけだ。

「でも、今後はアイルにも表舞台に立つてもらいたいの。……辛い

かもしだいけど、一人で守るからー！お願いよ、私とフイリーに協力して？一緒に神を信仰する陣営へを変えていきましょっ？」

そう言つて私の手を握りしめると彼女は懇願する。
普通の人間なら、その言葉に、心根に、信念に感銘を受けて、心から頷く場面なのかもしれない。

（どうして、私にそんなこと言えるの？）

心がそう叫びをあげて、強く苛立ちを感じた。

分かつていてる。彼女は『何も知らない』。

知っていたら、私にそんな事をいえる娘じゃないことは分かつている。だけど、それが何だというの？

知つてているからこそフイリーは私に何も告げなかつたというのに、
彼女はそれを察しないの？

「わ・私は…私は」

声が震えた。

怒りとも悲しみとも分からぬ、だけど大きな感情の揺れが私の中で震えていた。

「アイル？」

それを不思議に思つたんだろう、私が賛成することを微塵も疑つていらないリリナカナイが小首を傾げて私を覗き込む。

「私はっ！…！」

2・6（後書き）

過去編で詳しくは後々分かつてきますが、フイリーとリリナカナイもく神を信仰しない陣営へで育っています。

その彼らがどうして世界王と巫女になったかとか、アイルフイーダがどうしてリリナカナイに怒りを感じたり、リリナカナイが何を知らないのかなども、やっぱり過去編が全ての力がになつてきます。

「私は
」

この時、本当は何を言いたかったのだろう?
理不尽な周りへの鬱憤?
リリナカナイへの感情?
何もかも自由にならない事への嘆き?
愛されない自分への絶望?

「何をやっている?」

自分で自分の感情を制御できない混乱する頭に、静かな声が響く。
確かに喉元まで出かかった強い感情は、その声の正体に驚いて再び飲み込まれた。

「へ
「フイリー！…どうしたの！？」

扉の所に佇むその姿を見て、弾かれたようにリリナカナイが席を立ち駆け寄る。
その顔は満面の笑みに彩られ、声は喜色に満ちていた。
突然の王の登場に侍女たちも俄かに色めき立ち、私以外の全てが彼を中心に回りだす。

「リリナ…いや、もうすぐ会議があるんだつへ迎えに来たんだ。」

駆け寄った勢いのまま抱きつく彼女を優しく見下ろしながら、そう告げるフイリーの表情は、過去に彼女を見つめていた彼と寸分変

わりなく、優しく愛に溢れている。

『愛している』なんて言葉にしなくても、伝わってくる一人の絆に私は自分で一瞬だけ爆発しそうになっていた感情が、冷え切つていくを感じた。

(私：何を言おうとしていたんだろう？何を言ったところで何一つ変わった訳でもないのに)

二人が想いあつてていることは七年前から知っていた。

だからこそ、全てを諦めていたはずなのに、それでも私の中にフィリーを思う気持ちがある限り、一人が一緒にいるところを見て平氣でいられるはずもない。

「それより、どうして彼女がここにいるんだ？」

言葉とともにフィリーが私を見る。
その言葉と視線に宿る強さが、暗に私がここにいることを責めている。

「それ
「私が呼んだの。」

フィリーへの問いかに答えようとした私の声を、リリナカナイの声が
搔き消す。

「フィリーはアイルに何も言つなかつていいけど、やっぱり協力をお願いする以上、彼女を除け者にはできないよ。大丈夫、彼女は私の言つてることを理解してくれた。」

私はここにいるのに、まるで私がいないかのように一人の間で話

が展開する。

大体、私はまだ彼女の要請に承諾の意を示した覚えはない。

だけど、長い彼女の話の中で、否定の言葉一つ言わなかつた私は、リリナカナイの中では既に協力者らしい。

（ううん。そもそも貴方は私が断るなんて微塵も考えていなかつたんだろ？。）

私に『断られても、怒られても』いいから自分の言葉で協力を求めたかったと、彼女は言った。

だけど、今の様子を見て分かつた。

そうはいつても、彼女は実際に私の拒否する様子など何一つ想像してない。いや、想像できないといったほうが正しいのかもしれない。

い。

彼女のような特殊で選ばれた人間というのは、きっと他人に強く拒絶されたことなんかない。

だって、彼女はいつだって全てが正しから、誰一人彼女を拒絶することがない。

（それに拒絕したところで悪者になるのは私……ただでさえ居心地の悪い場所を更に自分から悪くしようなんて馬鹿としか言いようがないわね）

そう思つて、『そりだよね？』と言つて笑うリリナカナイに薄く笑つた。

自分の意見すら言えず、答えようと声を発しても全て遮られる。何だか自分という存在が酷く不必要な気がして、声を出すことすら億劫で、数歩歩けばすぐそこにいる一人が私には果てしなく遠く感じられた。

「何処まで話したんだ？」

「まだ、全然。明後日の誕生祭の事くらいかな？ねえ、会議までまだ一時間くらいあるわよね？これから三人で今後の事話し合いましょうよ！――アイルをビビりやつて国民に好意的な王妃として見られるようになるかとか考えなくちゃ…」

妙案だと言わんばかりに声を上げる彼女には、顔を歪めるフイリーが見えていないんだろう。

「リリナカナイ。君がどう言おうと、やっぱり俺は彼女をこれ以上巻き込むことは反対だ。」

「え？ だけど、私達話し合って決めたじゃない。く神を信仰しない陣営への王妃を大体的に打ち出して、国民の感情を変えていこうって…そのために恥を忍んで捨てた故郷に頭を下げたんじゃない…！ 折角、情勢が味方してそれが可能になったのに。」

一人の声をこれ以上聞いていたくない。

二人の姿なんて視界にも入れたくない。

冷えていく心と運動するように、指先が冷たくなって、震えることに気が付く。

それでも顔だけ笑っている自分が滑稽すぎて泣きたくなつた。

「だが、まだその準備は整っていない。事を急ぎすぎて、彼女に危険があつたらどうする？」

「それを守るのが私たちの役目じゃない！」

「勿論そうだ。だけど、俺たちもずっと彼女の近くにいるわけじゃない。彼女はお前や俺とは違つて普通の女性なんだ。彼女を守るためにもつともっと強い盾が必要となる。それを作ることには時間がかかる。

「

まるで大人が子供に言い聞かせるように優しい声で、貴方は私を自分とは違うと切り離した。

リリナカナイは同じで、私は違う。

(貴方と夫婦になつた私より、やつぱり彼女が貴方にとつて一番近しい人なのね)

「でも、巻き込みたくないつていても、アイルはもう貴方の王妃なのよ? ! そうである以上、表に立たなくたつて全く巻き込まないことなんてあり得ない!」

「だが、必要以上に表に立たせる意味もない。現状はお前と俺がいれば、今まで通り何でも上手くいくさ。そうだろ? 」

リリナカナイの華奢な肩を抱いて、まるで愛を囁くように言葉を紡ぐフイリーを私は呆然と見た。

(ああ、貴方が愛を囁くときはそんな顔、そんな声なの)

毎晩、私に告げる固い声じゃない。顔はいつも抱きしめられて見れないけれど、きっと顔だつてそんなにとろける様な表情じやないんだろう。

一緒にずっと戦ってきたパートナーと、自分に関わることも関わらせることも嫌な昔の知人程度の女じや、比べるまでもない。

(妻の前で他の女といちゃつく夫に、追いすがつて『行かないで』という資格すら私は持つていのいのね)

「フイリー…」

彼の言葉にリリナカナイが顔を赤くする。

そんな風にまるで周囲を忘れたかのように、熱い視線で見つめあう一人をどうにかして欲しいのは、どうやら私だけじゃないらしい。

「ウオッホン」

未だに立つたまま扉の入り口でやり取りを続けていたため見えなかつたが、フイリーは誰かを連れていたようだ。

扉の影になつて見えない場所から、野太い咳ばらいが聞こえて、リリナカナイは赤い顔を更に真っ赤にして、フイリーから離れる。私も金縛りにかかつたように固まっていた体が、急に自由になつたような気がした。

「レグナー！ ビッククリさせないでよ！ …」

「何言つてんだ、この巫女さんは？俺はずーっとここにいたんだぜ？ あんたがフイリーしか見えてなかつただけだろ？ が。」

リリナカナイがフイリーから離れると、のつそりと重そうな体を氣怠そうに一人の男が部屋に入つてくる。

（大きい…）

小奇麗な部屋に非常にミスマッチとしか言えない、大きく強面の男。

決して長身とは言えないが、平均的な男性の身長はあるフイリーより頭一つ分大きく、服の上からでも分かる筋肉質な体はまるで熊。小柄なリリナカナイが喚いても、まるで気にした様子もない。

「大体、あんたは何しに来たのよ！ ？ フイリーみたいに私を迎えてくれたわけ？ ！」

「ほんとにキヤンキヤンと子犬みてーに五月蠅いなあ。お前みたい

な色気のない小娘に俺様、

用はないの。」

「なんですかー！？」

どうやら彼らは犬猿の仲らしい、ああいえばこうこうといった感じでポンポンと言葉が行きかう。

リリナカナイの子供っぽい物言いも何だが、大男の方も彼女を挑発する気満々で言葉を選んでいるのは一目瞭然で、仲が良いのか悪いのか定かではないが、私はそれをオロオロと見ていくしかない。

(…はあ、もう私に用がないのなら帰つてもいいかしら？)

この後、何やら会議もあるようだし。私をどうやって利用するかどうかは、もう勝手に話し合ってくれればいい。

ここに座っているのも自分の気持ち的に限界に近づいてきている。これ以上、ここにいて更に傷つけられるような言葉も聞きたくない。

リリナカナイに断つてこの場を辞しようとして、心中で決意すると、とりあえずルツティにそれを伝えようと後ろを振り向こうとした。

「俺が用があるのは、お前みたいなチンシャクじゃなくて、もつと大人なレディだ！」

だけれど、その声と共に腕をぐいっとつかまれて、私は椅子から無理やり立たされた。

無様に転びはしなかつたが、無理な態勢で引っ張られたため大きくよろけた私を力強い腕ががっかり掴む。

「レグナ！」

「わーってる。わーってる。」

何が起きたか目を白黒させる私を、決して美形とは言い難い顔が覗き込む。

強面の顔の割に、小さくとも円らな瞳が興味深そうに私を見ている。

「大丈夫か？」
「はつはい。」

肩を支えられ、高い位置から覗き込まれた顔は近く、私は思わずのけ反りながら答える。

「ふざけるのはやめろ、レグナ。」

はつとじて周囲を見ると、驚く一同の中でフイリーだけが怒ったような顔をしてこちらを見ている。

「別にい？俺はふざけてなんていないぜ？俺は後宮から消えた王妃様を探して連れ戻すために来たんだし？」

「え！？」

彼はフイリーに向かつてそう言つたけど、その言葉の内容に私が素つ頼狂な声を上げた。

「うん？」

「あの、一応、後宮を出る時は後宮の護衛をしてくれている人に報告してもらつてこるはずなんんですけど？」

なのに『消えた王妃を連れ戻す』なんて言われるのは心外で、そお伺いを立てると私を間近で見下ろしていた顔の目と口が意地悪

い感じで弧を描いた。

「おひ、報告はもうつたぜ？だが、その報告の後色々あつて……なあ？」

レグナは私に答えているはずなのに、何故だか視線はフイリーに向けた。

「？？？」

「まあ、ともかく今日は後宮に戻つてもうつせ？のためにわざわざ騎士団長の俺様が迎えに来たんだからな。いいよな、フイリーも巫女さんも？」

疑問形で投げかけているはずなのに、大男にして騎士団長らしいレグナは私の肩を抱いたまま動き出す。

その言葉にいくらか怖い顔をしたままのフイリーが黙つて頷くのが、視界の端に見えた。

「え、ちょっと待つてよ……！」

だけど、リリナカナイはまだ言いたいことがあるらしく、レグナに背中を押されているため振り返つても姿は見えなかつたけれど、彼女の声が聞こえる。

「リリナ、もうやめな。」

そのあとにすぐフイリーの静止の声がかかる。

「だけど、まだ話が！……」

「そのことでも俺からも話がある。いつお

「

その後も一人の会話は続いたようだけれど、部屋から連れ出され扉が閉まってしまうと、その声はもう届かなくなる。
そうして私はやつと息がつくことができた。

「アイルフィーダ様、大丈夫ですか？」

私たちの後を追ってきたルッティが、どうやら見るからに疲れているらしい私に声をかけてくる。

それに声返す元気もなくて、少しだけ笑って答える。

ルッティは更に顔を心配そうに歪めた。

だけど、この時の私は彼女を思いやつて元気に見せる気力すらもうなかった。

(そういうれば、昔もリリナカナイと会った後はこんな風に心が疲れすぎて声も出なかつた)

あの時は姉エリーを酷く心配させたと、離れてしまつた姉のこと
が急に懐くかしくて切なく思い出された。

2・7（後書き）

これにて第一章は終了です。次章はまた過去編になります。
色々登場人物も増えてきて、互いの思惑や人間関係が現在と過去で
交錯しながら物語が展開しているので、今はまだ分かりにくい部分
があるかもしれません、きっと後々なるほど！と思つてもらえる
ような展開になるように頑張りますので、どうみても長い話になり
つつありますがお付き合い頂けると嬉しいです。

とはいっても、来週はちょっと実生活が忙しいので更新はあまり
できないと思われます。一応第一章は終わつたものの、話的には
まりきりがいいとは言い難いところで申し訳ありませんが、あまり
次をお待たせする事がないよう頑張りたいと思つていますので、
見捨てずにお待ちいただけると嬉しいです。

恋だと気が付く前に砕け散った感情は、歪な形となつて永遠に消えない傷になつた

貴方を思つ気持ちを恋なんて言わない。

それはきっと恋よりも深く、重く、醜い感情。

【八年前】

私は今恋をしている

そう自分で心の中で呟いて恥ずかしさのあまり悶絶し、手に持っていたTシャツに顔を埋めた。

「一人で何をやつしている?」

てっきり一人だと思っていたのに誰かの声が聞こえて、飛び上るほど驚いた。

「エリー！ いきなり吃驚するじゃない！」

振り向けば、同じ年の姉エリーが間近に立つてゐる。

床に座り込んでいた私を見下ろす彼女は、いかにも私を馬鹿にし

たよつにため息をついた。

「『吃驚するじゃない』はこっちのセリフだ。何回も部屋をノックしても気が付かない。部屋の鍵はあいている。こんなに近くに来ても気が付かない……いつものアイルだったら考えられない。」

「え、嘘？」

私が今いるのは寮の自室。

各自に一人部屋が与えられているけど、中は狭くベッドと箪笥と勉強用の机と椅子を入れたら、後は何も入らない。

その部屋で私は箪笥の中の洋服を全てひっくり返すくらいの勢いで並べて、ああでもないこうでもないと唸っていた所だった。

自室ということもあり油断していたところもあるだろうけど、ノックされて更に部屋に入つてこられても人の気配に気が付かないなんて、エリーの言つ通りいつも私だったら考えられない醜態だ。でも、

「まあ、いつもの私じゃないことか。」

「?.どうこう意味だ？」

エリーは眉を顰め、そんな彼女を見てにんまり笑う私に、眉間の皺を更に深めた。

「私ね、恋をしていると思うの。」

そして、自分でも阿呆なことを言つてはいるなと思いつつも告げた言葉に、エリーがあまり見せない間抜け顔を披露する。

「…………はあ？」

きりりとした美少年真つ青の凜々しい姉の顔が、笑ってしまふくらゐ呆けたものになつた。

それに笑いながら、私は繰り返す。

「恋をしているつて言つたのよ。だから、色々注意力も散漫なんだと思う。それについてはごめん。謝るけど…それよりも何着て行つたらいいと思つ?..」

謝意のない謝り方をして、それでも全く話についていけでいないエリーに広げていた洋服の一つをあせながら見せる。

明日は『ローズハウス』への奉仕活動の日。

奉仕活動を始めて春が過ぎ、今は夏も終わる頃。

マリア教師からは奉仕活動は終わつていといと言われていたが、授業があるときは毎休みに、夏休みに入つてからも怪しまれない程度に頻繁に通つてている。

それは理由として『ローズハウス』で色々勉強になると思うこと多く（実際、最近では将来老人や子供の世話ができる仕事に興味がある）、それも大きな一因ではあるのだけれど、そこに大きな不純な動機もある。

『ローズハウス』で私は恋をした。

それも青春真っ只中つて感じの、自分でも妙に照れるほどの淡い片思い。

「こ・こに」つて、まさか恋愛の『恋』か!?

「そうだけど?..」

やつと、私の言葉の意味を正確に理解したらしきけど、まだ受け入れられないのか問い合わせてくるエリーに顔はむけず、私は答えた。

「冗談だろ?!

「冗談でこんなこという訳ないでしょ？」

その言いぐせには少しむつとした。

怒った顔をしてエリーを見ると、彼女も自分の失言に気が付いたらしく顔を顰める。だけど、言い訳を続けた。

「だつて、アイルは昔言つてたじやないか！一周りにどんないい男がいようと、自分は恋愛感情を持てないって。」

「ああ、そういうえばそんなこと言つてたね。」

「だらう？？」

よくそんな事を覚えているなと思いつつ、確かに言つたことなどで頷いて見せる。

「だけど、それは『あの中』でつていう話だつたでしょ？ 実際、未だにあの人たちの中で誰かと恋をするなんて考えただけで鳥肌ものだよ。」

思い浮かぶいくつかの顔と自分が熱く見つめあつてているのを想像しただけで、ふるりと悪寒が走る。

「…彼らじゃないのか？」

「うん。むしろ何でそこにエリーの考えが辿り着いたか聞きたいよ。」

「それは夏休みを利用して、アイルは彼らに会いに行つたばかりだつたし。」

言われてそういえば、夏休み実家に帰る人ごみに紛れて『彼ら』がいる場所に戻つた。だけど、それは

「あの人たちに会いに行つたつていうよりは、ストレス解消に行つてきたつて感じだし。」

「だけど！ アイルはいつだつてここよりも彼らと一緒にの方が生き生きしているじやないか。私は怖いんだ。アイルがいつか向こうに帰つてしまつんじやないかつて。」

なるほど、だから私の恋をした相手が『向こう』の誰だと思つて過剰反応した訳か。

いつもは妙にしつかりしていて同い年とは思えないほど大人びているエリーが、しゃがみこんで頃垂れている姿は何だか可愛らしい。しかも、私の事をこんなに思つてくれている彼女の姿に、嬉しさが溢れてきて私は腕を伸ばして頭を撫でた。

「アイル？」

「私はずっとここにいる。そう決めたし、その事を後悔してもいいな。」

「うん。」

いつもだつたら、こんな子供にするよつなことをすれば逆上するに違ひないのに、妙におとなしく『うん』と返事をするエリーに私は笑つた。

「それに恋をした相手はこのメルト・ファウストの人なんだし、そんな心配は！」無用よ！』

そして、彼女を安心させるためにと明るくやうにうとい、エリーがずいっと顔を私に近づけた。

「そうだ。彼らではないなら、恋の相手は誰なんだ？ 女子高で、最近は遊びにも行かないアイルにそんな出会いがあるわけないだろう

？」

可愛らしいう子供返りしたエリーは霧散して、妙に据わった目が眼前に迫る。

田を逸らすことすら許されない気配に、話は誤魔化せそうにもない。

ただ別に隠すことでもないかと考えていると、エリーとはまた別の趣がある美少女が私の頭の中で怖い顔をした。

『言つておぐが、俺が男だと誰か一人にでもばらせば、それ相応の報復を覚悟してもうつ。』

どうみても自分より愛らしく、儂げな美少女が眼光鋭くドスを聞かせてそう言い放つた姿は滑稽で、だけどそれが自分の好きな相手かと思うと複雑のような笑えるような。

（まあ、別にニーアの事を好きだというのと、彼が女装した男だっていうのは全く別の事だもの。言つてもいいよね。）

心中でそう言いつて、私は『ローズハウス』で出会った同じ年頃の『少年』に恋したことをエリーに告げた。（実際、女装した姿しか見たことはないけど、ニーアは身も心も男らしいから間違つてはいない）

だが、彼女の追及はそこに留まらなかつた。

「そいつのどんな所が好きになつたんだ？」

「うーん、まずは『外見』かなあ？」

「顔だけの男のどこがいい！？」

まあ、『外見』といった私の言葉を聞いたら、そういう反応があ

つてもいいだろ？

エリーが思つてゐる『外見』と私の思う『外見』には大きく隔たりがあるし、私も別に美少女が好きなわけでは断じてない。それに本当の所は『外見』が良いということには、さして魅力を感じていないとと思つ。

だけど、初めてニーアを見たときに、彼を（あの時は彼女だと思っていたけど）綺麗だと純粹に思つた。

だからこそ、ニーアの事が心に残つたし、声をかけようと思つた。彼が醜くても好きになるような気もするけど、でも、人間つて結局体と心があつて一つの存在なのだから、それを切り離して考えるのも変な話だ。

だから、やっぱり彼の外見も好きなんだと思つ。

「まあ、でもね？私も一時は悩んだんだよ？」この感情が恋かどうかつて。」

初恋ではないけど、それまでの恋とニーアへの感情は大きく違つた。

「始めはね…同情かとも思つたの。」

「同情？」

「うん。彼は昔の私ととてもよく似た境遇について、それに同情しているんだって思った。そう考えた方が楽だとは思つけど…やっぱり恋なんだって諦めた。」

ニーアへの感情はすごい単純なような氣もするけど、複雑に入り組んでいるような氣もして、他人に説明するのは難しい。

そもそも…と考えて、私はちらりとベッド近くの時計を見て話を切る。

「ま、この話はもうやめよ。」消灯時間だよ？」

「あ、そつか。ごめん。」

「うん。別に謝る」とじゃないでしょ？」

「違う。家族といえど、今の私はアイルの感情に立ち入りすぎた気がして……昔の事や向ひの事は言わない約束だった。」

「いやって例え家族であつても、悪いと思つたら素直に謝る」とができるのはエリーの美德だと思つ。私もそんな彼女の潔さが心地いいと感じる。

「別に氣にしていないよ。私はどうでもいる普通の女子高生だもん。恋バナの一つや二つバンバンするつて。また、聞いてね？」

だから、ヒリーが氣に病まないよう笑つて、左手をヒラヒラせせる。

「うん。ありがと。おやすみ。」

「おやすみー」

彼女を見送った後、結構長く話していたのに洋服が決まってないことに気が付いて、消灯までの短い時間に私は慌ててそれを決めなくてはならなかつた。

3・1（後書き）

ちょっと少なめですが、何とか更新再開できました（笑）感想などで励まして下さった皆様、ありがとうございました。

内容は現在とは違つて、また妙なラブコメ？みたいな雰囲気を漂わせつつあります、色々アイルや一ーア（フイリー）の事情なども明らかにできたらと思っておりますので、お楽しみに。
ちなみにエリーがアイルの部屋にやってきたのは、最近の彼女が挙動不審だったから（笑）本人に自覚はありませんが、青春真っ只中のアイルは一人でテンパっているようです。

翌朝、ローズハウスへの道をとぼとぼと歩く私の服装は、Tシャツにズボンといういつも通りの色気のないものだった。

「はあ」

消灯時間まで自分なりに悩んでみたものの、どうにもしつくらこない上に、見るからに氣合いで入った服装は奉仕活動をしていくのに適しているのか?といつも更な問題に直面した。

結果、考えるのが面倒になつて洋服を散らかしたままベッドに入り、朝起きて、自分で片付けなかつたくせに、部屋の中の惨状に泥棒でも入つたのかと驚いた。(すぐに気が付いたけど)

そもそも急に私が洋服と格闘する羽目になつたかと言えば、ローズハウスでの何気ない日常が原因だった。

「アイルねーちゃんも、ニーアさんみたいにもうと可愛い恰好すればいいのに。」

それは本当に悪意のない言葉だったと信じたい…いや、悪意がないということはその言葉が真実ということになるからダメなのか?
……ともかく、その言葉を発した少年レイモンが私を見上げる瞳には、子供の特有の本当に不思議でなりませんという無邪気さしかなかつた。

あのお風呂での衝撃の事件より数か月、どうやらローズハウスで

は私とあと数人しかニーアを男だと知らないらしい中、それでも彼に纏わりついで私に折れる形で私とニーアは友達となつた。

友達というのは私しか思っていないかも知れないけれど、ローズハウスに私がいたらニーアは大抵私の所にも必ず顔を出してくれるようになった。

それは何だか懐かない猫に一歩だけ近づけたような、妙な高揚感を私に味あわせてくれた。

そして、そういう変化に伴い、今までは家族以外とは交流を持たなかつたニーアも私と一緒に大人や子供と接することも多くなり、その日もまた子供たち相手に遊んでいたところでのこの言葉。

「あははは」

なんていうか、乾いた笑みしか出でこない。

何しろそれは事実。

別に女になりたい訳じやないと云うニーアだけど、その女装ははつきり言って趣味の領域を超えていた。

洋服の下は文物の下着を身に着けているし（…これについては如何なものかと思うけど）、あまり露出の激しくない服装を選んでいるらしいけどズボンよりスカートのほうが多い。

更にさりげなく流行を取り入れお洒落度は高いはずなのに、決して品位を失わず、かといってローズハウスで浮くこともないという着こなしには頭が下がる。

「確かに！ アイルねーちゃんもオシャレの一つもしないと、彼氏ができるないよ。」

今度はおしゃまな少女ファラの言葉。

比較的子供たちには私とニーアはセットで扱われているような気がするけど、その実、待遇に差があるのは明確だった。

垢抜けない普通の女子高生の私と、絶世の美少女でビビリなくミステリアスな雰囲気漂う美少女ニーアでは当たり前かもしれないけど、子供たちのなつき方にも大きな差がある。

私に対しては『ねーちゃん』と軽口も叩くせに、

「オシャレしても生憎、私には彼氏はないけど?」

についつと私相手にはあまり見せない美少女の微笑みを浮かべて顔を覗き込めば、少女はたちまちのぼせ上ったように赤くなり、もじもじする。

「『めんなさい』ニーアさんの事を悪く言つつもりはなかつたの…。

「いいよ。『めん』めん、からかつちゃつた。」

ニーアに許しがもらえれば、とたんに満面の笑みになる。
そんなやり取りをしつつ、私は自分の洋服を見下ろしてため息をつく他ない。

私の服がいつもどことなくダサくて、ニーアがお洒落なのはわからきていたことで、だけど、ニーアは男で私は女。更にニーアは私の片思いの相手なわけで……

(それって女としてどうなの?)

そんな風に思わず対抗意識を燃やしてしまったのが昨日の洋服騒動の始まりだつたりする。

結局、いつも通りの服を着ていいのだから、戦う前から負けているというか、そもそも戦いなんて始まつてすらいないんだけど…、

ともかくそんな気分なのでかなり凹んだままローズハウスに着いた。

ニーアはまだ来ていない。

別にこの日に来ようと互いに約束している訳じゃないので、ローズハウスで会えないことも多い。

だけど、今日はそれでよかつたかもと、複雑な乙女心に浸つていると、

「アイル。ちょっとといいか?」

こんな風にニーアが現れたりする。

何で今日に限つてと、そんな感情が思わず外に出たらしく、

「別に嫌ならいいの。」

と、美しすぎる微笑み。

機嫌が悪いといふか、他人行儀になると妙に女の子じじくなるニアの氣質を理解しつつある私は慌てて首を横に振る。

「ううんっ大丈夫。えっと、キヌさんの散歩が終わつたら

「散歩なんてしたくないわ！」

私の言葉が言い終わる前に、車椅子に大人しく収まつていたはずの80歳を大きく過ぎたキヌさんが叫んだ。

長い年月で縮んだ体は車椅子に座ると更に小さくなり、髪は真っ白、顔はしわくちゃ。

かなり認知が進んでいて、こつしてつこさつきは散歩に行きたいと自分で言つていたはずなのに、数分後には自分が言つたことも忘れている。

時々、暴言を叫んで周囲を驚かせたりすることもあるけど、基本的には舌足らずなしゃべり方が妙に可愛らしいこのお婆ちゃん（大人といわないといけ）では怒られるけど）が、私は割と好きだった。

「え～？ キヌさんがわざと散歩したいって言つたんじゃないですか。

「わたしや、そんな」と言つとらんよー。」

背後から覗き込むようにして顔を見ると、皺の深い所から小さな目がこちらをぱちりと見ている。

円らな瞳にきょとんとした表情がぴったりで笑つてしまつ。老人を可愛いと思つたことなんて、ローズハウスに通うまで思つたこともなかつたけど、いつもして直に接してみるとお爺ちゃんとお婆ちゃんはとても可愛らしき。

姿というか、仕草とか言つていてこととか、妙に微笑ましいのだ。それは実際に大変なお世話をしない私だから言えることかもしれないけど、レイチャエルさんたちも良く子供だけでなく老人たちにも『可愛いね』と言つている。

それを聞いて本気で怒つている人もいるけど、大抵の人は喜ぶか照れたりしている。

いくつになつても他人に可愛いと言われたり褒められたりするのは、やっぱりうれしいものなんだと思う。

「そりだつけ？うーん、じゃあ、散歩やめてどうするの？」

「眠たい。眠たい。」

言いながら膝からの下を上下に動かす。

彼女なりのそれがダダの捏ね方だと知つている。

「横になりたいの？」

「うん。」

「しょうがないなあ。でも、昼間に寝ちゃうと夜寝れなくなっちゃうから、ちょっと寝てもいいか聞いてからね？」

車椅子をヒーターさせて建物に戻つて、スタッフさんに事情を話すと、とりあえず寝かそつかとキヌさんは私の手から離れた。あんなつてしまつと多分、自分の願いがかなつまでしゃべり続けてしまうから、スタッフさんも苦肉の策だ。

「その代り夜はちゃんと寝てよ?」

「わかつとるわ。」

すぐさまよい返事が返つてくるけど、多分数分後には忘れているだろうと、笑いながらスタッフさんに連れて行かれるキヌさんを見送つて、私はようやく二ーアに向き直る。

「『めん。それで何だつた?』

二ーアは私といふことと、子供や大人とも話すよつになつたけど、やっぱり積極的には関わろうとはしない。

それは彼が男とばれない為なのか、つていうか、何で女装しているの?つて話だつたりするんだけど、生憎それを尋ねたら無言で睨みつけられた。(なので、趣味という可能性もやっぱり否定できな)

二ーアは私にとつて、数か月たつた今でも謎が多くすぎる人物のままだ。

だけど、変わったこともある。分かったこともある。

「ああ、塔と一緒に付いてくれないか?」

「了解。今日はどの花にする?」

言いながら庭を見渡して、夏になり明るい色で咲くいくつかの花を見つける。

「この間は白だったから、あの黄色の花はどうだらう?」

異存はなかつたので、スタッフさんに断つてその花を少しだけ摘ませてもらつと、私たちは揃つて小さな塔へと足を向けて。ニアと出合つて数か月、私は彼の秘密を一つ知つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5374w/>

愛していると言わない

2011年10月9日07時05分発行